

# 海域アジア・オセアニア NEWSLETTER

創刊号 2023

## 目次

刊行の辞..... 1

### 【調査報告】

台湾の「新移民」のいま ..... 神宮寺航一 3

場所を見つめ直す ..... 渡邊泰輔 18

台湾客家八音にみる儀礼的感情とその行方 ..... 田井みのり 29

### 【エッセイ】

マオリ、日本のタトゥーを入れる ..... 深山直子 40

サモア初訪問記..... 河合洋尚 43

小嶺磯吉が収集したアドミラルティ諸島のダガー（短剣） ..... 畑中乃咲佳・山口徹 47

民族を越え拓がるフィジーの在来嗜好品・カヴァ ..... 大島崇彰 51

タイの潮州系料理 ..... 横田浩一 55

東南アジアにおける女性性器切除／女子割礼 ..... 松岡竜大 63

To Make a Sanheyuan Perfect ..... 田村あすか 65

東京の「狐の行列」における中国人の集まり ..... 李 婧 68

長崎の和華蘭料理 ..... 平松咲織 73

### 【活動報告】

2022 年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点研究会・活動報告..... 78

## 刊行の辞

海域アジア・オセアニア研究は、2022年4月より人間文化研究機構「グローバル地域研究」プログラムの一環として始まった。この研究プログラムは、アジア、アフリカ、アメリカ大陸といった陸地の地理的区分というよりは、地中海、インド洋、太平洋のような海域を跨ぐ、クロスカルチュラルな文化と人間活動の広がり重点を置くことに特徴がある。海域アジア・オセアニアは、環太平洋の西側を中心として東アジア、東南アジア、オセアニアを跨ぐ地域を主要な研究対象とするが、明確な境界はない。むしろ、日本の南西諸島、台湾、中国南部沿岸部、東南アジア島嶼部、オセアニア島嶼部を中核エリアとし、そこからグローバルに広がる現象を捉えようとする。

海域アジア・オセアニア研究プロジェクトは、国立民族学博物館、京都大学、東洋大学および本拠点（東京都立大学）により構成される。本拠点は社会・文化人類学を中心とし、東アジア、東南アジア、オセアニアという地域枠組みに収斂されない、近現代の人、物質、技術、情報のフローを捉えることを目的としている。

東アジア、東南アジア、オセアニアの研究は、これまで個別の学会により組織・運営されてきたが、それに象徴されるように、それぞれ別個の地域研究の枠組みのなかで発展してきた。だが、海洋という視点から捉えると、それらの世界を閉じた個別の領域として理解することはできない。たとえば、オセアニア島嶼部の場合、20世紀に入るまでに東アジアや東南アジアの資本が入り始め、アジア由来の物質文化がオセアニア先住民の間に浸透するようになっていく。また、オセアニアと台湾と日本の間には、先住民間のネットワークが築かれ、情報の交換がおこなわれてきた。他にも、台湾や沖縄は、中国大陸と日本だけでなく東南アジア、オセアニアなどとの関係のなかで、自己の社会・文化を不断に再定位してきた。本拠点は、このような境界を跨ぐボーダーレスな状況を把握するとともに、個々の事例を重ね合わせることで、海域アジア・オセアニア世界の諸相を明らかにすることを目指している。

本ウェブサイト掲載の『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER（以下、『NEWSLETTER』）』は、このような指針に従い、個々の研究者の調査成果の一端を掲載するものである。全体的に、この『NEWSLETTER』は、個々の研究者の自由な発想や最新の調査データを発表できる場としたいと考えている。近年の社会・文化人類学では、型にはまらない発想を述べる場や、ベタな調査データを記録として残しておく場が、ますます減少しているように見える。だが、たとえ覚書や旅行記のような文章であっても、その地域の研

究では貴重な論点やデータになることもある。このような考えに基づき、本『NEWSLETTER』では、下記の5つの欄に区分し、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトに関連する研究成果を掲載する。

- ① 論説：まだ論文とはなりきらない新たな発想、理論・方法、もしくは論評を中心とする。  
【字数：8000-12000 字目安】。
- ② 調査報告：特定のトピックに沿い、フィールドワークで収集した調査データを記述する。  
1～2年以内に調査した新しいデータの記述が望ましいが、過去に収集し資料／史料的な価値を有する調査データも歓迎する。【字数：8000-12000 字目安】
- ③ エッセイ：調査報告の短縮版、旅行記、見聞録、もしくは近年考えていることなどを自由に記す。【字数：1500-2000 字目安】
- ④ 書評・文献紹介：海域アジア・オセアニアの先行研究となる本の紹介・再読、最新の書籍の紹介・批評などをおこなう。【字数：2000-3000 字目安】
- ⑤ 活動報告：前年度のシリーズ講演会の要約、および主要なイベントの紹介をおこなう。

海域アジア・オセアニア研究は、東アジア、東南アジア、オセアニアという地域枠組みを超えたボーダーレスな現象を捉えることにある。ただし、ボーダーレスな状況を捉えるためにはまず特定の地域におけるフィールドワークが必要になることがある。そのため、この『NEWSLETTER』は、ボーダーレス研究を主軸に据えつつも、海域アジア・オセアニア圏内における特定地域のフィールド・データも掲載することになっている。また、本拠点の活動はウェブサイトの別のページでも掲載しているが、このページでも年度ごとの研究活動の一端をお伝えできればと考えている。

刊行期間は海域アジア・オセアニア研究プロジェクト実施期間中（2022年4月～2029年3月）で、年1回の刊行予定である。また、上記の5つの区分を満遍なく揃えることにこだわらず、1年の間に拠点に寄せられた文章を集約することを編集方針とする。本『NEWSLETTER』の各々の原稿が、海域アジア・オセアニア研究の発展、および読者の研究に、少しでも貢献できることを切に願っている。

海域アジア・オセアニア研究プロジェクト

東京都立大学拠点代表 河合 洋尚

## 台湾の「新移民」のいま ——台湾中・南部のフィールドから

神宮寺 航一

### 一 はじめに

本稿は、2023年9月に海域アジア・オセアニア研究プロジェクト経費で実施した、台湾中・南部への訪問の成果によるものである<sup>1</sup>。本稿の目的は、台湾における東南アジア出身の「新移民」に関する2022年の状況を報告することにある。新移民は「新住民」とも呼ばれ、台湾人との国際結婚を機に台湾に定住した人々を指し、現在の台湾社会では原住民、閩南人、客家、外省人の四大族群（注：族群=ethnic groupの中国語訳）に次ぐ第5のエスニックグループとして数えられている〔横田 2016〕。なかでも近年の台湾社会で特に存在感を増しているのは東南アジア出身の住民である。彼らの人口は、新住民が15万人、労働移民が70万人であり、これに新移民の第二世代を加えると、約56万人とされる原住民の総人口よりもはるかに人口が多いとされる〔玉置 2020〕。

台湾における国際結婚のブームは1980年初頭に始まった。1990年代後半から2000年代前半にピークを迎え、2003年には結婚件数全体の27.9%が国際結婚であった〔横田 2016 : 144〕。一方で、2000年代半ばまでは「処女保証」「花嫁が逃げたらもう1人娶れます」といった謳い文句の国際結婚斡旋の広告が公然と存在したことに代表されるように、国際結婚ブームを後押しした仲介システム自体が女性の商品化や人身売買の温床となっていたとして、マスメディアから厳しく非難された〔横田 2016 : 144〕。

また、台湾の新移民を検討するにあたって重要なテーマの一つが、前述の台湾の族群の一つである客家の世界に広がるネットワークである。客家は中国南部を始めとして世界各地に分布する漢族の支系の一つであり、台湾においても人口の約15%を占める一大集団とな

---

<sup>1</sup> 2023年9月5日から12日にかけて、河合洋尚、横田浩一、奈良雅史（台中市における調査のみ）、田井みのり、神宮寺航一、渡邊泰輔、田村あすかの7人で、台中市中心部および同市石岡区、東勢区、ならびに高雄市美濃区、屏東県佳冬郷を訪問した。

っている [飯島・河合・小林 2019]。横田 [2021] によると、東南アジア系の女性配偶者の中でのインドネシア女性の割合は全国平均では約 2 割だが、新竹県では約 5 割、苗栗県では約 4 割と、その割合が非常に高くなっている。これは客家の多い地域では、花嫁として西カリマンタン州出身の客家系の華人が多く選ばれていることと関係しているのだという [横田 2021 : 64]。

本稿ではまず、第二節で台中の市中心部、とりわけ「台中のリトル東南アジア（台中小東南亜）」として近年注目を集めている「東協広場」[呉 2022 : 25-26] とその周辺の新移民の状況に焦点を当て報告する。そして第三節・第四節で、客家人口が多いことで知られている高雄市美濃区、屏東県佳冬郷におけるインタビューで得られた、近年の新移民をめぐる情報を報告していくことにしたい。

## 二 台中駅付近の「小東南亜」

台湾中部の経済の中心地である台中市は古くから移民を多く受け入れ、郊外の客家地域においての国際結婚も非常に盛んであった [横田 2021]。現在では多国籍企業の工場が林立し、台中市は台湾を代表する国際都市の一つとなった。筆者が宿泊した市中心部のホテル近隣の銀行には、インドネシア語で「インドネシアに送金できます」の横断幕が掲げられていた (写真 1)。また台湾高速鉄道・台中駅のトイレには、ムスリム用の礼拝室があった。その隣の多目的トイレにはムスリムフレンドリートイレの表示があり、中には折りたたみ式の椅子とともに、礼拝前に手足を洗うムスリムのために設置されたと思われるシャワーがあった (写真 2)。駅のトイレにおけるこのような設備は、東京や大阪といった日本の大都市では見たことがない。



写真 1 インドネシア語が併記された銀行の横断幕 (2022 年 9 月 5 日、筆者撮影)



**写真2** 駅多目的トイレのシャワー設備

(2022年9月6日、筆者撮影)

台中市の中心駅である台中駅のすぐ近くに、東南アジア系の物販店舗が集まり、移民たちのたまり場となっている「東協広場 ASEAN SQUARE」というビルがある。呉 [2022] によると、東協広場は1978年に火災で焼失した市場の跡地に、1991年「第一広場」という名の複合商業施設として完成した。2000年以降に台湾中部広域から東南アジア出身の外国人労働者が休日に集まるようになり始め、ビルやその周辺エリアに外国人労働者を対象とした店舗・商店が増えた。そして、2016年には現在の「東協広場」と改名され、現在では東南アジア系のエスニックタウンとして認知されているのだという [呉 2022 : 25-26]。

2022年9月9日午前、太陽の照り返しが厳しく非常に暑い中、筆者は東協広場へ向かい、データ収集を行った。台中駅バスターミナルの次の停留所である最寄りのバス停の名前は、まだ「第一広場」のままであった。午前9時過ぎ、ビルの入口のシャッターは閉じられており、まだ内部に入ることはできなかったが、ビル前のエリアにはさとうきびジュースやバインミー（ベトナム風サンドイッチ）を売る屋台が既に商売を始めており、屋台近くに並んだテーブルの椅子には客が既にちらほらと座り始めていた（写真3）。台湾でいう東南アジア系移民のたまり場という点、横田 [2016 : 142] の報告にも見られる台北

駅の1階ロビーのような、床にシートを敷き、持ち込みのお弁当を食べながらのお喋りを想像していたが、ここでは屋台が中心となってたまり場が形成されているようであった。



**写真3 東協広場前のベトナム屋台**

(2022年9月9日、筆者撮影)

筆者は、試しに屋台でさとうきびジュースを買ってみた。店主より、中にライムを入れるか聞かれた。筆者が「要ります」と話すと、店主は「入れるのが好きな人も、嫌いな人もいるから、いつも最初に聞くんだ」と、少しベトナム語の訛りがある中国語で話した。続けて筆者が「あなたはベトナム人？」と聞くと、店主は「そうだよ」と答えたので、「私は日本から来たんですよ」と返すも、残念ながら筆者の中国語は通じていないようであった。屋台の客は、皆ベトナム語で会話していた。

東協広場の周辺を一周すると、ビル1階の道路に面している店舗は既に開店していた。東南アジア、特にベトナム系の雑貨を売る店が多く、看板もベトナム語表記が多かった(写真4)。ビル入口付近には中国語で書かれた商店、安宿や漫画喫茶などの看板があり(写真5)、ベトナム語で広告を出すナイトクラブの存在も確認できた。また、1階正面入口の近くには中国寺院も存在していた(写真6)。全体としてベトナム語で会話する店主・客が非常に多く、またベトナム人向けと思われる両替店や携帯SIMカードの販売店も多くあったことから、現在の東協広場は新移民の生活の場としてだけでなく、主にベトナム系の短期滞在の労働移民の憩いの場としても機能していると考えられる。





写真4 広場1階外周の商店

(2022年9月9日、筆者撮影)



写真5 1階エントランス 中国語で書かれた看板

(2022年9月9日、筆者撮影)



写真6 1階の中国廟

(2022年9月9日、筆者撮影)

一方で、東協広場の東側には、インドネシア語で書かれた看板が集中するエリアが存在した(地図1)。こちらはインドネシア人向けと思われる雑貨店や両替店、SIMカード販売店の他、インドネシア料理のレストランが集中していた(写真7)。



地図1 東協広場付近の地図、右下の台中駅から東協広場まで200メートル程度

(Google map より筆者が加工)



**写真7** SIMカード販売店を兼ねたインドネシア料理店  
(2022年9月9日、筆者撮影)

このエリアにある店のメニューを見ると、インドネシアの中華系のレストランでよく見かける bakso goreng (魚の揚げ団子) や pan tiao goreng (炒めライスヌードル) の文字が確認できた (写真 8)。近隣にもインドネシアの中華料理を提供する店が多く、これらの店舗は新移民、もしくはインドネシアからの帰国華僑が経営している可能性が高いと考えられる。先に述べたようにインドネシア人の新移民の中には西カリマンタンの客家系華人も多いので、このエリアのコミュニティには客家ネットワークが多少なりとも関係している可能性もある。一方で、インドネシア本国で人気のパダン料理店や、インドネシア語のみで「昔の恋人の思い出は忘れても『思い出カフェ』は忘れるな」とユーモアに溢れた文章が書かれた看板も見られるなど、短期滞在のインドネシア人向けと考えられる店舗も多く存在していた (写真 9)。





写真8 レストランのメニュー  
(2022年9月9日、筆者撮影)



写真9 (左)パダン料理店 (右)「思い出カフェ」  
(2022年9月9日、筆者撮影)

台中市政府観光旅遊局のウェブサイト<sup>2</sup>における記述によると、以前はこのエリアも焼失した市場の一部であったという。第一広場が建設される際、このエリアはビルの敷地とはならず、現在まで古い街並みを残したままである。旅遊局は街のレトロさを活かした観光開発を目指しているようであった。日本の旅行ウェブサイト『台北ナビ』<sup>3</sup>によると、このエリアには2000年頃からインドネシア人相手の店舗が増え始めたのだという。

旅遊局のウェブサイトでは、東協広場を「台中のリトル東南アジア」と呼ばれる観光地<sup>4</sup>、として取り上げているが、その東側のエリアに暮らすインドネシア人の多さに言及されていなかった。一方で、東側のエリアの街灯には「東協広場 ASEAN SQUARE」の文字が掲げられており、東協広場とここを一体化してエスニックタウンとして売り出そうとしているアクターの存在が垣間見える。

このエリアにおける新移民や帰国華僑、そして客家に関する先行研究は、筆者が調べた限り見当たらなかった。このエリアに実際にはどのようなコミュニティが存在するのか、またどのようなアクターがここをエスニックタウンとして売り出そうとしているのかについては、今後の検討課題としたい。

また、東協広場の西側には非常に古い団地が存在し、現在は住人の退去も進み、再開発を待っているという雰囲気であった。現在のところ、広場西側に東南アジアと関連する店舗などを見つけることはできなかったが、再開発を行うのであれば、台中市の東南アジア系移民の増加に合わせてここが「エスニックタウン」に組み入れられるのかどうか、台湾のエスニックタウン研究においても注目すべき事例となり得るだろう。

### 三 美濃における東南アジアからの新移民

客家人口の多い高雄市美濃区には、多くの新移民が存在することが知られている。1990年代に行われた研究によると、美濃の基幹産業であったタバコ製造の衰退により、若年男性の伴侶探しが非常に困難となった結果、美濃では多くの外国人花嫁を受け入れ始めた〔夏

---

<sup>2</sup> 「成功路青草街」『臺中觀光旅遊網』<https://travel.taichung.gov.tw/zh-tw/Attractions/Intro/378/> (2023年3月18日最終閲覧)。

<sup>3</sup> 「エリアを歩こう・中部編～台中火車站周辺～」『台北ナビ』<https://www.taipeinavi.com/special/5027704> (2023年3月18日最終閲覧)。

<sup>4</sup> 「東協廣場」『臺中觀光旅遊網』<https://travel.taichung.gov.tw/zh-tw/attractions/intro/73> (2023年3月18日最終閲覧)。

2018 : 61-62]。美濃における国際結婚で特筆すべき点は、それが現地の伝統的なネットワークに根ざして行われていたということである。夏によると、美濃では客家の外国人花嫁が好まれ、仲人となる者の家で、美濃の男性たちは常に花嫁候補の最新情報を交換していた。花嫁の來台後にも仲人は夫婦の相談役となるなど、美濃における国際結婚は、他地域で見られるような広告による花嫁募集というよりはむしろ、客家の国際ネットワークや美濃における既存の人間関係が基礎となったものであった [夏 2018 : 62-63]。

美濃における新移民の現況を調べるため、筆者は 2022 年 9 月 10 日午後、地元の名士である A 氏より美濃区内にて聞き取りを行った。聞き取りを行ったカフェは日本統治時代の警察署を改装した日本風家屋（写真 10）で、室内には日本の現代美術家の作品が多く飾られており（写真 11）、ここからも台湾の多元文化が感じられた。以下の記述内容は A 氏からの聞き取りに基づく。



**写真 10** 日本統治時代の警察署を改装したカフェ

(2022 年 9 月 10 日、筆者撮影)



**写真 11** 室内に飾られる日本作家の作品

(2022年9月10日、筆者撮影)

1995年、美濃の龍肚小学校に、台湾初の外国人花嫁の中国語クラスが誕生した。近年は無くなったが、一時期、中国語クラスの履修証明がないと台湾の身分証を得られない政策が施行されていた時期があったためだという。約15年から20年前に、美濃では外国人花嫁の来台の最盛期を迎え、その頃は小学校の3分の1は外国ルーツの児童だった。一方で、近年は外国ルーツの児童は減少傾向にある。

現在の美濃の新移民の国籍としては、第一にベトナム、次いでインドネシアが多い。1980年代、国際結婚ブームの初期はインドネシア人が多く、やはり客家系華人が多かった。その後ベトナム人が多くなり、その頃にはカンボジア人の新移民も美濃に来ていた。彼女らは「外配」と呼ばれたが、1990年代後半には「陸配」と呼ばれる中国人が多くなった。しかし、2000年代からは中国の経済発展に伴って中国人の新移民も減っていったという。

これらの新移民への中国語クラス提供などの生活補助サービスについては、当初は行政やNPOなどが担っていたが、「外国人花嫁が未だに差別され続けている」ということで、新移民は自分たちで「南洋台湾姉妹会」という団体を作って相互扶助を始めた。南洋台湾姉妹会は現在では台湾全国で活動を行っているが、元々は美濃で成立したものだという。

A氏は、近年の新移民をめぐる諸問題についても話して下さった。近年来台したベトナム系の新移民は、その多くが外食店を開くなどして生計を立てているが、中には性風俗店を開いているケースもあるのだという。美濃の一部の新移民は、工場で働く在台ベトナム人労働者の男性と、ベトナムに住む若い女性を偽装結婚させ、男性には月数千元を渡す。これは「低収入の工場労働者にとってはいい稼ぎ」なのだという。そして、合法的に台湾に滞在できる身分を得た女性を來台させ、新移民の店で売春させるのだといい、これは約10年から15年前に美濃における大きな社会問題となった。

ここまでがA氏からの聞き取りの内容である。先行研究では、タバコ産業の衰退によって壊滅的な被害を受けた美濃の社会的ネットワークが、国際結婚に関わる一連のアクターや実践を起点として部分的に復活したことが指摘されているように[夏 2018]、美濃における国際結婚は現地ネットワークに深く根ざして行われている。これは、新移民の相互扶助団体が美濃を発祥として誕生したこととも無関係ではないだろう。一方で、聞き取りからは新移民による偽装結婚が近年になって社会問題化したことも示唆されており、美濃と新移民の関係性を論じるにあたって、伝統的なネットワークに根ざした国際結婚という従来のモデルが現代にも適用できるのかに関して、更なる検討を進めていく必要があると考えられる。

#### 四 客家の伝統食文化を継承する佳冬郷のベトナム系新移民

9月11日午後、筆者は同じく客家人口の多い屏東県佳冬郷を訪れた。このとき、佳冬郷で惣菜店を営むB氏にインタビューを行った。B氏はベトナム・ホーチミン市出身で、23年前に佳冬郷に来た新移民である。B氏の惣菜店には大きな厨房や冷蔵庫があり、屋外には大きな竈や鍋があった。B氏は中国語に非常に堪能で、筆者は自己紹介を受けるまで彼女を台湾出身だと思っていた。また、同時に店内でテイクアウトの料理を待っていた、店の常連客であるという客家のC氏にも聞き取りを行った。

B氏によると、佳冬郷には非常にベトナム人が多く、インドネシア人の住民も少なくないという。ベトナム人の大規模なコミュニティもあるが、B氏はそれほど参与していない。一方で、B氏のベトナム人の友達との付き合いは盛んであるという。佳冬郷は小さな町であるが、東南アジアの雑貨や食料品を売る店が複数あり、日常生活には不便はない。佳冬郷のベトナム人住民の特徴として、新移民の女性だけでなく労働移民である男性も多いことが挙



げられる。男性たちは、近隣の町にいくつか存在する規模の大きな工場で働いているのだという。筆者が調べた限りでは、佳冬郷の付近には大企業が所有する大規模工場は存在しなかったことから、中小企業に受け入れられた労働移民が、佳冬郷のベトナム人男性住人の多くを占めているものと考えられる。

B氏と普段から仲が良いというC氏によると、B氏は台湾人との国際結婚によって佳冬郷に来た新移民であるという。同様に來台した新移民のベトナム人女性が、佳冬郷内には非常に多い。B氏は中国語だけでなく客家語のレベルも相当なもので、C氏とは普段客家語で会話している。C氏はB氏について「すごく働き者で、食べたい料理を頼めば客家料理でも何でも作ってくれる」と評していた。また、屋外の大きな竈を使い、客家のお菓子も作ることができるとのことだった。この日は中秋節の翌日であったが、中秋節の前日にはB氏が作った紅龜粿という伝統的な客家のお菓子が、店のテーブルの上にたくさん並んでいたのだという。

## 五 おわりに

今回の訪問では、台湾到着後4日間の隔離期間があり、長期間のホテル生活に疲れ果てた筆者は、隔離明けの夜に台中駅の周辺を散歩した。台中駅は現在高架駅となっており、以前使用されていた日本占領時代の駅舎は文化遺産として保存されている（写真12）。台湾文化の多元性を体感したと同時に、台中駅の周辺でも多く見かける東南アジアからの移民は「多元文化」の一員として認識されているのか、という疑問が筆者の頭をよぎった。



写真12 台中駅旧駅舎

(2022年9月5日、筆者撮影)

本稿の報告でも明らかなように、東南アジアからの新移民は、現代台湾社会において様々な側面から存在感のあるアクターであることは疑う余地がない。台中の市中心部には東南アジア系の移民が集まるビルがそびえ立ち、新移民や外国人労働者のコミュニティのための広場として機能していた。また、婚姻、そしてそれに伴う外国ルーツの児童の増加という側面を見ても、美濃の学校における全児童の3分の1が外国ルーツであった時期があることから、新移民やその子どもたちの実践が現地の習俗に多少なりとも影響を与えた可能性もあるだろう。併せて、客家の多い地域では客家系華人との結婚が多かったことから、新移民の存在が台湾国内外を跨ぐ客家のネットワーク形成の一翼を担ったことも想像に難くない。さらに、東南アジアの新移民は自ら飲食店を始めることも多く、台湾の食文化にも何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。実際に、インタビューを行った佳冬郷の新移民は、現地の客家住民の口に合う料理を振る舞うだけでなく、儀礼用の伝統的な菓子をも作って売っており、客家の伝統的食文化を継承する上でも大きな役割を背負っていた。

今回の訪問では、現地の方々から様々な局面で「多元文化」という単語を聞いた。台湾政府からは「アジア太平洋の多元的な台湾」[玉置 2020: 31]という国家像に言及される際に用いられることの多い「多元文化」という表現であるが、フィールドのレベルでは、台湾や台湾客家の文化は、ポルトガル、オランダ、鄭成功、清、日本、中国国民党という様々な支配者が持ち込んだものの複合体であり、多元的なものである、ということを説明される際に用いられていたという印象を受けた。今回の訪問の結果からは、台湾では今後、新移民たちが「多元文化」の重要な担い手となる可能性が高いことが示されているといえる。

最後に、訪問の最終日である2022年9月12日、筆者が訪れた六堆客家文化園區の展示に触れて本稿を終えたい。文化園區には、「外国人の目に映る六堆」と題する展示があり、日本人やアメリカ人の研究者による客家研究への貢献が記されており、筆者は台湾の客家がいかに関局的な視点から研究されているかを再確認した。今回の訪問で得られたデータを踏まえると、次回この文化園に来訪した際には、客家文化の継承を実質的に担っている新移民たちの目に映る六堆に関する記述が「外国人の目に映る六堆」の展示に加えられているかもしれないのではないだろうか。

## 謝辞

今回の訪問では、客家委員会・客家文化発展センターの方々、協力者の方々、そしてインフォーマントの方々には大変お世話になりました。コロナ禍の中での訪問が成功し、貴重なデータが得られたことは、ひとえに皆様のご尽力とご協力があったからこそです。この場を借りて深くお礼申し上げさせていただきます。また本稿の執筆の過程では、東京都立大学の横田浩一先生に、台湾研究の専門家の視点から非常に多くの有意義なコメントを頂きました。ここにしてお礼申し上げます。

## 参考文献

- 飯島典子・河合洋尚・小林宏至 2019『客家——歴史・文化・イメージ』東京：現代書籍。
- 夏 曉鵬 2018『「外国人嫁」の台湾——グローバリゼーションに向き合う女性と男性』（前野清太郎訳）、東京：東方書店（夏曉鵬 2002『流離尋岸——資本国際化下の「外籍新娘」現象』台北：唐山出版社）。
- 呉 素汝 2022「台湾在住外国人に向けた多言語表示——台中東協廣場の調査から」『言語文化共同研究プロジェクト』2021：23-32。
- 玉置充子 2020「台湾の対東南アジア関係の進展と社会の多元化」『拓殖大学台湾研究』4：29-57。
- 横田祥子 2016「東南アジア系台湾人の誕生——五大エスニックグループ時代の台湾人像」陳來幸・北波道子・岡野翔太編『交錯する台湾認識——見え隠れする「国家」と「人びと」』pp. 142-153、東京：勉誠出版。
- 2021『家族を生み出す——台湾をめぐる国際結婚の民族誌』横浜：春風社。

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)

## 場所を見つめ直す ——台湾社区营造の多様な実践

渡邊 泰輔

### 一 はじめに

私は、「海域アジア・オセアニアプロジェクト」により、2022年9月1日から9月13日までの間、数人の教員と大学院生と共に台湾を訪れ調査を行った。台湾を北から南まで巡りながら音楽、建築、新移民、食など各自の研究関心のある箇所立ち寄った。その中で私が調査したのは、「社区营造」と呼ばれる運動についてである。「社区」とは英語の *community* の訳語で日本語ではコミュニティ／共同体／まち等と訳され、「社区营造」でまちづくりを意味する<sup>1</sup>。

今回の調査の目的は、社区营造の実践と2022年現在の台湾人が持つ社区营造への印象を調べることだった。具体的には、日本統治期に作られた水利インフラを中心とした農業地域の台中市新社区と、客家が多く住む屏東県佳冬郷における社区营造について調査を行った。また、高雄市美濃では社区营造にも関わった現地研究者とディスカッションを行い、社区营造の現状を教えていただいた。

この調査報告では、その経験を踏まえて台湾の社区营造を整理し紹介することが目的である。そのためまずは、社区营造が盛り上がった1990年代の時代性に注目したい。

### 二 社区营造の時代性、理念、方法論

そもそも「まちづくり」とは何だろうか。その形は多様だが、日本で行われている環境保護や観光事業のように、共通するのはその場所の個性を大切にするという姿勢だろう。実際に台湾の社区营造はそのような日本のまちづくりに影響されてもいる [簡 2007: 132]。しかし、台湾で「台湾らしさ」を強調することは当然のことではない。そこには現在まで続く

---

<sup>1</sup> 中国本土でも社区は存在するが、その性質は台湾とは大きく異なる [cf. 河合 2013: 第五章]。本稿で扱う社区は台湾のものに限られる。

台湾の複雑な歴史が関係している。

1949年から1987年までの38年間、共産党との国共内戦に敗れ流れてきた国民党が戒厳令を敷いたことで、台湾では言論の自由が剥奪されていた。この時、国民党は自らを正統な中国政府と位置付けていたため、(中国とは異なる)台湾文化は日本統治時代に続き厳しく抑圧されることになった。さらに、長い国民党独裁期は経済発展と引き換えに深刻な環境問題、生活様式の劣化を引き起こしていた。

そんな社会状況のなか、1970～1980年代になると、都市で反体制運動、環境運動が草の根で盛り上がった。都市での運動が収束すると、その余波は台湾各地のコミュニティ＝社区へと伝播し、それまで抑圧されていた人々が文化や環境の修復・保存など身の回りの問題に主体的に取り組むようになった [簡 2007 : 122]。こうした運動は「社区营造」と呼ばれ、1990年代に盛んになった。

国民党政府への抵抗運動として始まった社区营造だったが、台湾の民主化・本土化が進むと、むしろ政府にとって重要な運動となった。1989年に台湾史上初の野党である民主進歩党が誕生し、1990年には李登輝(国民党)が史上初の台湾出身の総統に就任したように、1990年代は政治体制も大きく変わろうとしていた。特に李登輝は、台湾のアイデンティティを押し出し、「生命共同体」としての国家建設を目指した。つまり、この時期は台湾政治の場においても、国民党独裁期の反動から中国とは異なる「台湾らしさ」が大きな問題となっていたのである。草の根の社会運動から始まった社区营造は、時代の流れの中でこうした大きな政治と結びついていく。住民主体の社区营造こそが、台湾人としてのアイデンティティを形成するのに重要だと捉えられたのだ。そして、李登輝政権期の1994年には社区营造を推進する「社区総体营造」政策が実施された。そこには台湾人の主体性と市民社会の構築という理念が打ち出されているが<sup>2</sup>、他にもそれまでなかったまちづくりの方法論が提示されていた。

社区総体营造において、社区は行政区分の「里」を最小単位として申請される(ただし、社区自体は行政区分ではない)。承認されると、(写真1)のような「社区発展協会」と呼ばれる中間団体が設置され、行政から資金を調達し活動が行われる。活動の内容は年ごとに評価され、それにより資金の増減が決まる。社区营造が政治的イシューとして発見されたことで、この外部資本という選択肢が生まれ、自力での活動に限界がある地域に力を与えたので

---

<sup>2</sup> 台湾の市民社会論における社区营造については河口 [2010] を参照。

ある。



写真 1 社区發展協會の例<sup>3</sup>（台中市東勢区）（2022年9月7日、筆者撮影）

### 三 社区營造の広がり と 共通点

コミュニティを意味する社区は、台湾では国民党独裁期からの人々の主体性と台湾らしさの形成という理念に結びついてきた。確かに社区総体營造にはその理念が書き込まれており、抑圧された台湾文化の表出は政治の場でナショナリズムと捉えられ得る。しかし、当然ながら社区營造の全ての担い手が民主化の理念を体現しようとしているとは言えない。むしろ、社区総体營造の理念や方法論が転移した様々な実践があり、それらを総称する形で「社区（營造）」という一般名詞が存在するといった方が正しいだろう<sup>4</sup>。つまり、社区營造

<sup>3</sup> 写真1の「社区」については以下を参照  
<https://community.society.taichung.gov.tw/introduce/Details.aspx?Parser=99.5.28....16413....423..403>（2023年3月4日閲覧）。

<sup>4</sup> 紙幅のため割愛したが、社区関連政策の複雑さも理解を妨げている。そもそも社区関連政策の始まりは国民党独裁期の1960年代に行われた「社区發展」政策に遡る。そこでは、国民党によるインフラなどのハード面への「上から下」の開発政策が行われていた。1990年代以降の「社区総体營造」政策は、その反動として住民主体の「下から上」の運動であることが強調された。この対比だけなら分かりやすいのだが、実際には両者の政策が並行して行われているだけでなく、近年では「農村再生計画」や「地方創生」などの政策が新たに加わったことで、社区營造と言った時にどの政策と関係しているかが分かりづらい。

には、社区総体营造政策のもと行われる狭義の社区营造と、政策とは直接関係なく行われる住民主体の活動全般を指す広義の社区营造があるのである。

従って社区营造には目的の異なる非常に多くの実践が含まれるが、大なり小なり共通しているのは、その活動の過程で住民がしばしば自分たちの住んでいる場所に向き合い、それまで意識することのなかった地域の歴史や文化を再発見していく点である。以下では、台中市と高雄市で見聞きした事例から、そうした社区营造の営みの一端を紹介したい。

#### 四 統治の歴史の資源化——台中市新社区における社区营造

新社区は、台湾第二の大都市である台中市の中心から車で一時間ほど行った場所にある市轄区である。区の東側には大甲溪という大きな河川が流れ、それを水源とした農業地帯が広がっている。この大甲溪から新社の台地へと水を供給しているのは、「白冷圳(はくれいしゅう)」という日本統治時代に作られ用水路である。台湾でサトウキビの生産増大に取り組んでいた日本は、各地で養成所を設置した。新社区の養成所(写真2)もその一つであり、白冷圳は新種のサトウキビの苗の生産に必要なとなった大量の水を賄うために建設された。



写真2 旧大南養成所(現・成果展示室) (2022年9月8日、筆者撮影)

台湾では日本統治時代に幾つもの灌漑施設が建設された。その中には八田與一の作った嘉南大圳のような有名なものもあるが、白冷圳は長らく注目されることはなかった。ところが2000年代以降に白冷圳を文化遺産化する動きが急に活発となり、建築主任だった日本人



技師・磯田謙雄の出身の金沢市との交流も生まれている。この全くの無名だった日本統治時代のインフラから文化遺産への転換に大きな役割を果たしたのが、被災の経験と社区营造だった。

1999年9月21日、台中市を含む台湾中部は未曾有の大地震（通称：九二一地震）に見舞われた。1932年に完成し戦後も使われ続け老朽化が問題となっていた白冷圳は、この地震により決定的なダメージを受ける。一時は廃棄も検討されたが、新型の電気モーターを使った用水路は資金面・実用面からも現実的でなかった。すると、住民の一部から白冷圳に使われている自然の地形を生かした「逆サイフォンの原理」はコスト面でも優れており、また白冷圳自体には新社台地の開拓の歴史と結びついた文化的価値があるため、修復すべきという提案がなされた。こうして、白冷圳の復旧と文化的価値の発信を目的とする社区营造が始まった [林 2015 : 24]。

白冷圳を中心とした社区营造の中心となったのは、「促進会」（正式名称：社團法人臺中縣新社鄉白冷圳社區總體營造促進會）という団体だった。促進会は白冷圳の修復計画にも携わりながら、次第にその文化的価値の発信をしていった。しかし、資金面・人材面の不足に悩んでいた促進会は、当初から政治家や研究者と連携しながら活動を行っていた。促進会にとっては、彼らが重要な外部資本だったのである。では、社区营造の結果は具体的にどのような形で現れているのか、今回の調査で訪れた場所から紹介したい。

調査では養成所や取水口などを巡ったが、中でも白冷圳の技術的目玉である「逆サイフォン方式」が見える白冷圳記念公園は、ここの社区营造にとって象徴的な場所だと言える。「逆サイフォン方式」とは、噴水や谷を越える時などに使われる技法で、水面より低い場所を経由して水を送る仕組みである。白冷圳にはこの技法が三箇所採用されているが、なかでも二号逆サイフォン（写真3）は世界的に見ても巨大なものであり、白冷圳の技術的価値を象徴している。さらにこの二号逆サイフォンが見える白冷圳記念公園には磯田謙雄の銅像（写真4）が建てられており、側にある橋には「日台友好の橋」（写真5）と刻まれている。ここから分かるように、白冷圳では技術だけでなく日本統治時代の歴史がその文化的価値を支える重要な要素となっている。このようにかつての支配者である「日本」の要素を再発見し、文化的資源として活用することは、国民党独裁期にはできなかったことだ。これは、社区营造の結果であり、民主化の影響でもある。





**写真3** 二号逆サイフォン（2022年9月8日、筆者撮影）



**写真4** 磯田謙雄像（2022年9月8日、筆者撮影）



写真5 日台友好の橋 (2022年9月8日、筆者撮影)

## 五 文学・社会運動・教育——高雄市美濃区における社区营造

台湾の南にある高雄市美濃区は、社区营造も絡んだダム反対運動で有名である[星 2013]。私も当初はこのダム反対運動を中心に聞くことになると考えていた。しかし、私が現地の人に案内されたのは、客家の生活を描いた鍾理和という作家の記念館(写真6)だった。なぜ文学館に案内されたのか、最初はその理由が分からなかったが、展示内容を見るうちにその理由が分かった。





写真6 鐘理和記念館・外観（2022年9月10日、筆者撮影）

鐘理和記念館は二階建ての建物で、一回は鐘理和の足跡を辿る展示が置かれていた。ガイドを務めてくれたのは、鐘理和の実の息子で記念館の現館長だった。説明によれば、鐘理和は、日本統治時代、国民党独裁期と強権的政治により自由な創作活動が行えない中でも自らの身の回りの生活を書き続けた。1980年代になり民主化の流れが生まれると、「台湾文学」として彼の作品の評価も上がり、映画化もされた。記念館には、政治的動乱の中で書き続けた鐘理和の足跡と、彼を支えた妻の愛情について展示されていた。

2階へ上がると、そこには記念館の成り立ちと、ダム反対運動を含めたこの地域一帯の社

会運動の歴史が展示されていた。館長が強調していたのは、この記念館が台湾で初めての行政の支援を受けずに建てた文学館だという点だった。最初なのは民間の文学館というだけではない。ここには他にも、「笠山文藝營」（南方で初めての文学者グループ）、「台灣文學歩道園區」（初めての台湾作家の文学の道）、「旗美社區大學」（初めての農村型社区大学）という四つの「初めて」が存在した。順に簡単に説明しよう。まず、「笠山文藝營」とは、毎年テーマを掲げて2泊3日でそれに関する討論を行う活動のことを指す。テーマは客家文化や生態文学など多様である。「台灣文學歩道園區」は、日本でもあるような、作家の作品と景観を結びつける活動である。館長氏によれば、石川啄木の文学の道に影響を受けたという。どのような経緯で啄木の話が伝わったかは、調べる価値がありそうだ。最後の「旗美社區大學」にある社区大学とは、民間で組織された開かれた教育機関のことで、狭義の社区营造と関係している。その中で旗美社區大學は、それまでの都市にあるものとは違う農村型のものとして台湾で最初だった。校舎などは存在せず、空いている場所で授業を行う。生徒も大人が多く、教師と生徒という関係ではなく、教え合い学び合う関係だという。

では、これらの活動とダム反対運動はどのように関係しているのだろうか。館長によれば、ダム反対運動をする際の拠点となったのがこの記念館だという。実際に彼は、2階の窓から見える自然を指し、「ダムができれば、この自然は全てなくなっていた」と説明してくれた。そして、ダム反対運動で培った社区营造のノウハウは、社区大学を建設する際に多いに役立ったという。さらに、この社区大学の発足には鐘理和基金会の助けも加わっており、ここからもこの記念館の重要性が伝わってくる。

以上から、美濃の社区营造においては「文学」が中心となっていたことが分かる。厳しい言論弾圧の時代の中で身の回りの生活を描き続けた鐘理和の存在が、この場所の社区营造の源となっていたのだ。政府に頼らないその姿勢は後に、ダム反対運動や社区大学へとつながり、彼の作品は文学の道として自然と溶け合っている。

## 六 課題と展望——社区营造は終わった？

今回の調査で私が訪れた台中市新社区と高雄市美濃区は、ともに社区营造の活発な地域だった。新社区では被災を期に白冷圳に目を向けるようになりかつての統治者である日本の要素が積極的に表象され、美濃では台湾文学とそれに大きく影響された社会運動や教育が民間で行われていた。活動の内容やプロセスは違えど、そこに共通するのは、住民が自分

たちの生まれ育った場所について考え活動したということだ。それは、日本統治時代や国民党独裁期にはできなかったことであり、民主化の流れと、住民の主体的な社区营造の結果である。台湾におけるまちづくりには、このような深く長い文脈広がっているのだ。

最後に、社区营造がいまどの様に受け止められているかを現地の研究者（X氏）へのインタビューから紹介したい。X氏によれば現在（2022年9月）の台湾では社区营造という言葉は良い印象を持たれないという。それは狭義の社区营造の仕組みと関係している。社区营造の理念は地元住民が自分たちの住む場所の問題関心に主体的に取り組むことにあったが、実際にはそこに住んでいない人も行政に対し社区を申請できる。X氏によれば、社区营造が流行する中で、申請を手伝う代わりに分前を要求する守銭奴のような部外者が増え、社区营造に対する負のイメージが付いてしまったという。そのため、現在では社区营造に変わって地方創生政策が2019年から始まった。文化事業に重点を置く社区营造に対して地方創生では就業機会の創出など経済的側面が重視されている。今回の調査はちょうど中秋節と重なっていたのだが、出店の中には地方創生を利用した若者によるドライフルーツの店があった。

では、地方創生によって狭義の社区营造も広義の社区营造も取って代わられたのだろうか？ 私の考えでは、そうではない。むしろ広義の社区营造の中に新たに地方創生という側面が加わったと考えるべきだ。なぜなら、社区营造はいまだに行われており、地方創生と重なるところは多いからである [石井・佐藤・長谷川 2020 : 126]。また、大陸中国と台湾の複雑な関係は現在も続いている。その中で、「台湾らしさ」に目を向ける社区营造の営みはこれからも研究し続ける価値がある。

## 謝辞

本調査は、人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」の共同調査の中で行われた。共同調査では、河合洋尚先生(東京都立大学)、横田浩一先生(人間文化研究機構・東京都立大学)、奈良雅史先生(国立民族学博物館)、そして大学院生の田井みのりさん(東京都立大学)、神宮寺航一さん(東京都立大学) 田村あすかさん(東京都立大学)と共に行動した。調査員ごとにテーマは異なり、筆者は社区营造を担当し、本調査結果を得た。

河合先生、横田先生、奈良先生、神宮寺さんには通訳の面で非常に助けていただいた。またここでは名前を挙げていないが、台湾でも多くの人に貴重なインタビューをさせていた

だいた。ここに感謝の意を申し上げる。

## 参考文献

- 石井大一郎・佐藤綾香・長谷川万由美 2020「台湾における社区まちづくりの展開と人材育成——1994年以降のまちづくり政策：社区营造三期と台湾版地方創生に着目して」『宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要』8：113-30。
- 河合洋尚 2013『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。
- 河口充勇 2010「台湾における市民的公共性の構築を巡る学術と政策の動向——陳其南の「公民社会」論とその政策的実践を手掛かりに」藤田弘夫編『東アジアにおける公共性の変容』東京：慶應義塾出版会、pp.77-102。
- 簡子晏 2007「民主化の担い手としての社区運動——歴史的発展の分析と諸類型」西川潤・蕭新煌編『東アジアの市民社会と民主化——日本、台湾、韓国にみる』東京：明石書店、pp. 120-172。
- 星純子 2013『現代台湾コミュニティ運動の地域社会学——高雄県美濃鎮における社会運動、民主化、社区総体营造』東京：お茶の水書房。
- 林慧真 2015『災難与社区発展——台中市白冷圳流域社区総体营造促进会之研究』長栄大学硕士学位论文。
- 和田清美 2014「台湾における社区营造研究の課題——コミュニティ形成・まちづくりの日台比較研究のために」『都市政策研究』8：27-48。

(わたなべ・たいすけ 東京都立大学大学院)

## 台湾客家八音にみる儀礼的感情とその行方

田井 みのり

### 一 はじめに

中国大陸や台湾の伝統音楽である八音は、神祇祭祀や祖先祭祀、結婚式、葬式での演奏を担い、客家の人びとの生活における折々の感情と密接に結びついてきたといわれる。しかし、近年では様々な社会変化のなかで、八音の演奏はその録音や西洋の音楽、また日本の歌謡曲などの演奏に取って代わられている。さらに担い手の高齢化も相俟って八音楽団自体の減少もみられる。こうした状況にある八音だが、中国や台湾の広範な地域において祭祀の中心となる音楽であるにもかかわらず、日本においては人類学・民俗学的な研究が管見の限りなされていない。

そこで本稿では、台湾の研究者によって書かれた先行研究を踏まえながら台湾客家の八音の概要、儀礼における感情的な表現というその特性について述べるとともに、実際に現地で聞いた人びとの八音とその変化に対する意識を提示する。

本調査報告は9月5日から12日にかけて台湾中部の石崗区および南部の美濃・屏東で実施したフィールドワークによるものである。今回の調査では、鍾聰明屏東縣八音協會、溫福仁客家八音、林作長八音団の演奏を聴く機会に恵まれた（写真1、2、3）。そのため、以下の報告は演奏の観察と、八音の専門家とそうではない人双方の語りに基づいている。



写真1 美濃客家文物館での溫福仁客家八音の演奏（2022年9月9日、筆者撮影）





写真3 美濃客家文物館での林作長八音団の演奏（2022年9月9日、筆者撮影）



写真2 屏東の楊家での演奏。屏東八音協会の楽団による山歌の演奏の様子（2022年9月11日、田井撮影）

## 二 台湾客家八音の概要

八音の由来については諸説あるが、概ねどの文献でも一致しているのは、「八音」とは、古代中国における楽器の分類だということである。『中國音樂史』[蕭興華 1998] の記述によると西周王朝（紀元前 11 世紀から紀元前 771 年）の頃には既に 70 種類以上の楽器があり、新しい楽器が増えるにつれ、それを分類する必要が生じた。そこで楽器の材料によって



「金、石、土、革、絲、木、匏、土」の8種類に分けたという<sup>1</sup>。

表1 台湾客家八音の演奏機会

月日（特記がない限り旧暦）	機会
1/1	春節
1/15	元宵節
4/5 前後(新暦)	清明節
5/5	端午節
7/15	中元節
9/9	重陽節
12/22(新暦)	冬至

こうした歴史を持つ八音は、台湾と中国大陸全域で見られるが、他方では客家伝統文化の主要な構成要素の1つとみなされ、「客家八音」と呼ばれている。客家八音は客家山歌と並び客家音楽の代名詞的存在でもある。客家八音は、冠婚葬祭の際に欠かせないものであり、人びとの暮らしに根付いて行われてきた。台湾の客家八音の主な演奏機会として挙げられるのは、結婚式、葬儀、誕生日（做壽）、廟の祭（廟會）、神の生誕祭（神明生日）などであるが、今回の調査では、結婚式や葬儀以外では、表1の機会に八音が演奏されることを聞き、多様な場面で求められていることが窺えた。それは台湾客家の様々な儀礼の中核となり、神々や祖先に供物を捧げ敬意を示す「三献礼（三獻禮）」の進行において、八音が主要な役割を担っていることと関係があると考えられる [柯 2005]。

一方、台湾の客家八音の演奏機会や形態には地域差が見られる。台湾の南部と北部を比較した時に、南部の方が八音の演奏が盛んであり、伝統的な形での実践が残っているということは、今回の調査においてよく聞かれた。台湾の南部の中でも、特に美濃や六堆地域が八音の演奏が盛んだとされる。台湾の北西部に位置する苗栗で話を聞いた際には、結婚式や祭祀

<sup>1</sup> 謝宜文のまとめによる。

では八音が演奏されるが、葬儀では八音の演奏はされないということだった。他方、美濃では葬儀でも演奏がされると聞いた。台湾南部の儀礼の際の八音の研究においても、葬儀で八音が演奏されることが書かれている [e.g. 柯 2005]。

次に八音楽団の編成について見ていきたい。八音では多様な種類の管弦打楽器が用いられ、主要な楽器としては管楽器では、嗩吶や簫、弦楽器では、胡弦、椰胡、二弦、打楽器では、大鑼、小鑼、小鈸、堂鼓などがある(写真 4)。中でも最も重要な楽器だとされるのは嗩吶である。嗩吶は日本では「チャルメラ」という名で親しまれている楽器である。葦を削った2枚の板(リード)で音を鳴らす縦笛であり、中国大陸を中心に幅広い国や地域で、少しずつ形を変えながらみられる。嗩吶奏者はその大きな音で楽団を先導するリーダー的な存在であるとみなされ、八音楽団の名前には、しばしば嗩吶奏者の名前がつけられる(写真 5)。



**写真 4** 台中市石崗区の土牛客家文物館における八音の展示 (2022年9月7日、筆者撮影)

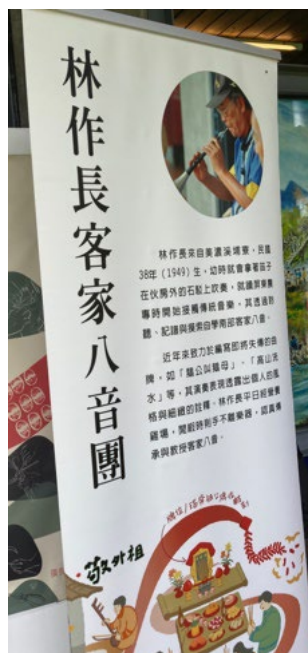


写真5 美濃客家文物館の八音楽団紹介（2022年9月9日、筆者撮影）

八音において唢呐は欠かせないが、その他にどのような楽器用いられ、何人で演奏されるかといったことも地域によって差がある。特に南部と北部の演奏形態の違いは顕著である。南部の美濃では伝統的に、唢呐1人、椰胡2人、打楽器1人の計4人で演奏される。美濃で八音楽団の演奏者に聞いた話では、結婚式や祭祀では四人で演奏されるのに対して、葬儀ではもともと3人で演奏されており、最近では1人で演奏することもあるという（写真6、7）。少ない人数で演奏する場合には、唢呐奏者が唢呐の演奏の合間に打楽器の演奏もするといったように、1人が複数の楽器を担当する。また湛敏秀によると、美濃を含む台湾南部の六堆地区では演奏人数は4人から6人であり、それを超えることはないという。それに対して、北部の八音は大人数で演奏され、桃園では唢呐は最低でも2本、多い時は4本以上であるという〔湛2001〕。北部では、北管と呼ばれる比較的大きな編成の合奏音楽の影響があり、八音楽団が北管の演目を演奏することもあると聞いた。



写真 6・7 美濃客家博物館における温福仁客家八音の演奏。右の写真は唄吟奏者が打楽器を演奏する様子（2022年9月9日、筆者撮影）

### 三 八音と感情

今回の調査で耳にし、また先行研究でも述べられている八音の特徴として、その演奏がそれぞれの儀礼において喜怒哀楽を表現することが挙げられる「e.g. 湛 2001」。筆者が八音の説明を聞いている際に、例えば「悲しい音楽」といったように、感情を表す語彙によって語られることがしばしばあった。特に客家の結婚式と葬儀の演奏は対照的な感情的特性を持つものとして捉えられている。音楽と感情の関係については、西洋音楽を中心に哲学や心理学、美学、認知科学など様々なアプローチから研究がされてきたが、伝統的な儀礼の音楽を担う演奏者から、音楽の感情的な表現が重視されていることは興味深い。

今回の調査で話を聞いた八音楽団の唄吟奏者は、葬儀と結婚式や神祇祭祀では曲調が異なることを指摘する。彼は結婚式や神祇祭祀の八音の演奏は、音高が高く、テンポが速く、明るい曲調である。一方、葬儀では、テンポは遅く、音高は低く、悲しい曲調だという〔河合、田井他 2023〕。劉怡君〔2015〕によると、こうしたことは、八音を先導する楽器である唄吟の「配管」違いにも表れる。「配管」とは、「調式」つまり旋法<sup>2</sup>のことであり、八音の演奏では、演奏機会や曲ごとに「管」が決まっているのだという。例えば、「工管」と呼ばれる旋法の演奏を聞くと人びとは葬儀を思い浮かべる、といったように、それぞれの「管」ごとに位置付けがなされているという。その一方で、鄭榮興〔2000〕は熟達した演奏家の手にかかると、どんなに「悲しい管」を用いても、喜びをもって演奏することができる

<sup>2</sup> 音階を形成する一定の音組織。音階と混同されることがあるが、田辺尚雄は音階には基本音列的な意味を、実用音列的な意味を持たせている〔音楽之友社 1966〕。

も述べる。八音による感情の表現は、楽曲や「管」の違いによるだけでなく、それを表現する演奏者の技量にかかっているのだ。また、湛敏秀 [2001] の調査によると、佳冬八音團團長の林彦香は、八音は葬式では弔いの音楽を演奏して遺族の涙を引き出すなど、感情を呼び起こすものだと言ったという。ここからは、八音が感情的な表現をすることの先には、儀礼において人びとのいかなる感情を引き出すかが意識されていることが窺える。

客家八音は、客家人が巡りゆく自然の中で土地を開墾し、農作業にいそしみ、神や祖先の加護に感謝する儀礼をおこなうなかで生まれてきたものだという [曾萃玫 2013]。それは客家人の生・老・病・死の音楽文化を軸に、客家人の人生経験、喜び、悲しみを表現する [古芸禎 2011]。このように、客家八音は人びとの人生儀礼、神や祖先を祀る祭祀と深く関わり、切り離せないものであった。

#### 四 現代的变化と感情の行方

しかし、近代化の影響を受け、八音をめぐる状況は変わってきているという。美濃で伝統文化の保存や地域活性化のための運動に携わる F 氏（男性）によると、20 世紀後半以降、台湾政府が海外文化の導入を推奨したこともあり、八音は「古いもの」だとみなされるようになっていった。その一方、西洋的な音楽、ポピュラー音楽が「かっこいい」ものとして受け入れられていったという。そのようななか、儀礼においても八音の演奏機会が失われ、西洋的な音楽や中国の合奏音楽に代わられていった。注目すべきは、日本の歌謡曲も結婚式や葬儀においてしばしば演奏されているということである。そうしたポピュラー音楽の演奏に使用する楽器は、フルートやドラム、サクソ、トランペット等であるという。

葬儀と結婚式や神祇祭祀における八音の曲調が異なることは先に述べたが、西洋的な音楽や日本の歌謡曲を用いる場合にも、各儀礼による曲調の違いが意識されている。例えば、日本にも縁のある曲だと、葬儀では「蛍の光」と同じ旋律の曲「驪歌」や「慈しみ深き」などの悲しい曲調の曲、結婚式では、テレサテンの曲など明るい曲調の曲が用いられるという [河合、田井他 2023]。

冠婚葬祭などの儀礼における音楽が、宗教的なもの、その地域に根付いた慣習的なものから、脱地域的・世俗的なものに変わることは、台湾客家に限った傾向ではない。近年、日本やヨーロッパにおいても、結婚式や葬儀の際の音楽が、宗教的なものから、ポピュラー

音楽などの世俗的なものに変化していることが指摘されている [e.g.田井 2020, Van der Smissen 他 2019]。日本では、結婚式でポピュラー音楽が用いられることは、いまや当たり前のこととなっているが、近年、葬儀においてもポピュラー音楽やクラシック音楽を用いることがある。無宗教葬において「音楽葬」という音楽を中心とした葬儀が行われるのみならず、仏式の葬儀でも、読経以外の場面でポピュラー音楽、クラシック音楽などを生演奏する演出が行われている [田井 2020]。ヨーロッパにおいても葬儀の音楽が、宗教的なものやクラシックから、ポピュラー音楽に変化してきていることが指摘されており、例えば、オランダのある葬儀場では「オンラインプレイリスト」が導入され 3500 もの楽曲の中から故人や遺族が曲を選ぶという [Bruin-Mollenhorst 他 2018]。日本やヨーロッパのこうした変化の背景として、人びとの死生観や宗教観の変化が挙げられている [Caswell 2011; 田井 2020]。つまり、人生の節目において拠り所となるものが、既存の宗教や地域の慣習から、日常的に親しんでいる音楽へと徐々に移行してきているのではないかということである。

一方、F 氏の語りには、八音の過渡期において儀礼を行う際の葛藤が見られた。彼が結婚式を行った 2000 年ごろには、結婚式当日の儀式ではポピュラー音楽の楽団だけ呼ぶことがほとんどだったという<sup>3</sup>。しかし彼は「八音を捨てたくはないが、ポピュラー音楽の楽団がないと楽しくない」という思いから、両方の楽団を呼んだ。そして、結婚式当日には、どちらがどの場面で演奏するかで喧嘩をした [河合、田井他 2023]。先述したように、伝統的な音楽である八音と西洋的な音楽の双方が、葬儀や結婚式、祭礼において、その機会にふさわしい感情を表出し、そのことによって人びとの感情に訴えかけることが期待されている。一方で、宋廷棟が八音とポピュラー音楽の両方が必要だと語ったことから、八音とポピュラー音楽のそれぞれの位置付けの違いが意識されていることが窺える。

柯佩怡 [2005] の調査における、八音楽団と西洋的な音楽の楽団の双方が呼ばれた美濃のある葬儀の事例は、儀礼での八音とポピュラー音楽に対する人びとの意識の違いについて示唆的である。その葬儀では、場面ごとに八音楽団と西洋的な音楽の楽隊の演奏する場面が分かれている。「三献礼 (三献禮)」を中心に、主祭者が決められた手続きで儀礼を行う各プロセスでは、そこに組み込まれる形で八音が演奏されるが、その儀礼の前後や火葬時にはポピュラー音楽が演奏されている。こうしたことから柯佩怡は、八音は儀礼の進行において

---

<sup>3</sup> 台湾では結婚式の前日に新婦方の祖堂に赴き新婦方の祖先を参拝する「敬外祖」の習俗がある。その際には、現在でも八音が行列の船頭をするが [洪馨蘭 2015]、録音代用されることもある。前日の儀式では今でも八音が演奏されることが多い

必要であり、ポピュラー音楽は「雰囲気」を作るという役割の違いがあるという。近年、結婚式や神祇祭祀では部分的に八音の演奏の録音を使用することが増えているようだが、今回聞いた話によると葬儀では必ず生演奏で行われるという。この理由としては葬儀の中心的な儀礼の各プロセスと密接に八音が関係していることにより、録音や西洋音楽では代替できないものとなっていることが考えられる。

このように八音は、台湾客家の儀礼において中心的な役割を果たし、またそれだけでなく、客家の人びとの「捨てられない」思いゆえに、変化の波にさらされながらも、部分的に形を変えながら継続されている。F氏によると、一度は衰退の道を辿った八音だが、2000年ごろからは、政府の方針もあり八音の復興運動が盛んに行われているという〔河合・田井他2023〕。こうした状況について、様々な変化にさらされているからこそ、客家人の精神的支柱として、八音が重要なものとなっているともいえるだろう。一方、柯佩怡〔2005〕が八音と西洋的な音楽との融合はいまや美濃地域の葬儀文化の一部となっていると述べるように、その継続性の中で、西洋音楽が取り入れられ、現代の客家の人びとの感情に寄り添いながら新たな文化を形成している。鍾兆生〔2017〕は、人々が神々や祖先がつながるための客家の儀式において八音は不可分であり、象徴的な意味を与えられているだけでなく、その響きによってそうしたつながりを体現するための具体的な手段であるという。それを考えたときに、本稿で述べてきたような変化が台湾客家の人々の死生観や宗教観、冠婚葬祭等の儀礼生活全般において何を意味するのか、引き続き調査をする必要がある。

## 謝辞

本調査報告は、海域アジア・オセアニア研究 プロジェクト経費で実施した河合洋尚・横田浩一・奈良雅史・神宮寺航一・渡邊泰輔・田村あすかの共同調査の成果による。今回の調査では、客家文化センターの協力や茄苳文史協会や美濃愛郷協進会などの協力を得て、台中市の新社区白冷圳、石崗郷、大茅埔、屏東県水埤郷建功村、屏東県佳冬郷および高雄市美濃区を訪れた。また、幸運にも美濃客家博物館では、溫福仁客家八音と林作長八音団の演奏を聴くことができ、屏東県佳冬郷の楊家では茄苳文史協会の楊景謀氏の計らいで鍾聰明屏東縣八音協會の方々に八音と山歌等、客家伝統音楽の演奏をご披露いただいた（写真 8）。石岡郷でも客家音楽の演奏家の方が山歌の弾き語りを聴かせてくださり、山歌と八音に用いる楽器について説明をいただいた。短期間ではあったが充実した調査となり、このような機



会をご準備いただいた河合先生をはじめとする先生方、通訳等で助けてくださった院生のみなさま、上記に書ききれなかった、台湾でご助力いただいたすべての皆さまに感謝申し上げます。



写真8 屏東の楊家での演奏。屏東八音協会の楽団による山歌の演奏の様子（2022年9月9日、渡邊泰輔撮影）

#### 参考文献

音楽之友社編 1966『標準音楽辞典』音楽之友社。

河合洋尚・田井みのり・渡邊泰輔・田村あすか 2023（掲載決定）「現代に生きる『伝統』——台湾客家地域の音楽・民居・社区景觀『客・観』4。

田井みのり 2020「死と音楽——現代日本における『音楽葬』の付置」東京都立大学修士学位論文。

Bruin-Mollenhorst, Janieke. Hoondert, Matin.J.M. 2018 Musical Media in Dutch Crematoria,1914-Present. *THANATOS*7: 6-31.

Caswell, Glenys. 2011-2012 Beyond Words: Some Use of Music in the Funeral Setting. *OMEGA* 64(4): 319-334.

Van der Smissen, Doris. Steembakker, Margaret A. Hoondert, Matin J.M. Van Zaanen Memmo M.2019 Music and Cremation Rituals in The Netherlands: A Fine-Grained Analysis of Crematorium's Playlist. *Digital Scholarship in the Humanities*, 34 (4): 806-817.



- 曾 萃玫 2013「六堆地区客家八音文化伝承探討以『大夥房芸術団』為例」国立屏東科技大学碩士論文。
- 古 芸禎 2011「国民小学推展客家八音教学之研究——以苗栗地区三所学校為例」国立新竹教育大学音樂学系碩士論文。
- 洪 馨蘭 2015『敬外祖——台湾南部客家美濃之姻親關係與地方社会』国立中央大学出版社。
- 柯 佩怡 2005『台湾南部客家三献礼之儀式與音学』台北：文津出版社。
- 劉 怡君 2015「台湾客家八音嘖呐的管路與活奏之研究——以吹場樂〈新義錦〉為例」国立新竹教育大学音樂学系碩士論文。
- 湛 敏秀 2001「吳招鴻(阿梅)之新興八音団及其客家八音技芸研究」国立芸術学院音樂学研究所碩士論文。
- 鄭 榮興 2000「客家音樂的管路與線路」『彈音論樂』pp.262、台北：高談文化。
- 鍾 兆生 2017「遺產化過程中美濃客家八音與地方常民生活關係之研究」客家委员会獎助客家學術研究計畫。
- 蕭 興華 1998『中国音樂史』台北：文津出版社。
- 謝 宜文 2017『美濃地区——客家還神祭典与客家八音運用』行政法人高雄市立歷史博物館・晨星出版有限公司。

(たい・みのり 東京都立大学大学院)

## マオリ、日本的タトゥーを入れる

深山 直子

学生時代より、ニュージーランドの最大都市オークランドを拠点に、先住民マオリに関して調査研究を続けている。2023年3月、コロナ禍が緩和したために、3年ぶりにオークランドにて長年近い関係にあるファーナウ（マオリ語で拡大家族）に再会することが叶った。

成田からオークランドへの直行便は、朝に到着する。空港にだいたいファーナウの誰かが車で迎えに来てくれる。私が調査期間中に居候する家に向かう前に、朝食をとるためにコーヒーショップに向かうのが、お決まりのコースだ。「姉」たちに連れていかれたコーヒーショップでは、30歳前後の「姪」とコロナ禍期間中に生まれた「姪」の子が待っていてくれて、より一層感慨深いものがあった。それぞれにオーダーしたメニューを待っている間、子をあやししながら「姪」が軽い感じで唐突に、「明日、タトゥー店を予約したよ。みんなで行くからね」と言い放った。私は驚いて、「え、なんのこと？」と聞き返す。だが、実は以前にもタトゥーの誘いを受けたことがあった。その度に日本ではまだ一般的ではないとか、痛いのは嫌だとか、公衆浴場に行きづらくなるとか理由を付けて断っていたのだった。

オセアニアは伝統的に、広くタトゥー文化があることで知られている。マオリ社会では、固有のタトゥーのことをター・モコあるいはモコという。イギリスの植民地化によって衰退を余儀なくされたが、1970年代以降に文化復興が進み、近年はその方法や意味などが変容しながらも再びター・モコが活性化している。現代ニュージーランドは、ター・モコに加えて、その他ポリネシア系のタトゥー、あるいは欧米系のタトゥーなど、複数の系統のタトゥー文化が並存しているところといえよう。特に若者の間では、タトゥーを入れることは一般的で、カジュアルに個人の判断で行われることが多い。このファーナウやその親族においても、20代から50代ぐらいのメンバーの多くは、体のどこかにタトゥーが入っている。そのデザインは、曲線が特徴的なター・モコならではのもの、飾り文字の言葉、ユニコーンや木やきのこ、アニメのキャラクターなど、多様だ。

「姪」の話をもっと聞いていくと、今回予約したのは、オークランド中心部に所在するタトゥー店で仕事をする人気の日本人タトゥーイストで、「姪」、私と同年代の「姉」、「妹」そして私の4人分を依頼したという。話が具体的であることに焦る私を前に、「姪」が笑いながらも真剣な様子で「これはファーナウの絆を強めるためのイベント、みんなで日本のタト

ゥーを入れるよ！」というようなことを、まくしたてた。

その後、家に移動してからも、私への説得は続いた。このファーナウとその日本人タトゥーイストの出会い、半年前に遡る。「姪」のサモア系のパートナーが、タトゥー店に飛び込みで入った際にこの日本人タトゥーイストに出会い、腕に日本的タトゥーを入れることになったという。「姪」たちは彼の腕のタトゥーをみて、その技術の高さ、デザインのエキゾチックさに魅了されて、自分たちも同じタトゥーイストに入れてもらおうと考えたのだろう。だが私が3年ぶりにやってくるということで、話は軌道修正されたとみえて、ファーナウに日本人がいるから、ファーナウの証としてみなで日本人タトゥーイストから本物の日本的タトゥーを入れるのだ、という話になっていた。私、そして日本文化が、彼女らにここまで「刻み込まれ」ている／ることに感動を覚える一方で、彼女らの誘いを受け入れられないことに、私は再会初日にもかかわらず、困り果てていた。その横で、彼女ら3人は嬉々として、どんなデザインを依頼するのか、スマホを片手に画像検索をしながら盛り上がっている。どうしてそれを希望するに至ったのかわからないが、「姉」は沖縄のシーサーをモチーフにしたデザイン、「妹」は鯉および鶴それぞれの写實的デザインと折り紙のデザイン、「姪」もまた鶴の折り紙デザインを、腕に入れることに決めていた。タトゥーのことなんてまるで知らないが、ファーナウに「誤った」デザインを入れさせるわけにはいかないから、私にもわか日本人代表としてスマホで調べながら、口をあいている雄のシーサーは右側だとか、鯉は登り鯉というからこの向きがよかろうとか、折り紙の柄に桜の花模様はありうるとか、もっともらしくアドバイスしてみる。他方彼女らは隙あらば私に、何を入れるのか、どこに入れるのか、と尋ね、小さいデザインならばいいだろう、見えにくいところならどうだ、と説得の手を緩めない。そのしつこさに、いっそもう入れてしまおうか、と心が揺らいだが、やはり世間体や家族・友人の評価を恐れているのだろうか、他人のタトゥーはどうも思わないが自分がタトゥーを入れることはできないと感じ、場がしらけることを申し訳なく思いながらも、固辞し続けたのだった。

翌朝、3人のマオリ女性と私は車でオークランド中心部に向かった。私はようやく、彼女たちをなんとか納得させて、あくまで見学人という立場だ。開店を待って入店し、1人ずつタトゥーを入れてもらっている間、他の3人は店の周辺を歩いたり、店のソファでゲームしたり軽食を食べたりして、いらつくことなくひたすらに待っていた。それぞれのタトゥーはほぼ単色でワンポイントと呼べる程度のサイズであったので、所要時間はひとり1時間半から2時間ほどに留まったが、なんせ3人もいたので、結局夕方までそこで過ごすはめ

になった。私は暇を持て余していたから、機械を手に淡々と正確に作業を進める日本人タトゥーイストと、だいぶおしゃべりもした。日本、オーストラリア、そしてニュージーランドで仕事をしてきたベテランのタトゥーイストで、彼の半生もまたドラマチックであった。

かくして、3人の腕にはそれぞれ、新たに日本的タトゥーが刻み込まれた。彼女らの体には今、ター・モコ、欧米系タトゥー、「無国籍」的タトゥー、そして日本的タトゥーが隣り合っている。そのことに、海を越えて広がるタトゥー文化が映し出されていると同時に、海を越えて通い続ける私が多少なりとも関わっているということで、なんとも複雑で消化しきれない思いを抱えている。

(ふかやま・なおこ 東京都立大学)

## サモア初訪問記

——サモアで中国とアジアの影響をみる

河合 洋尚

私は大学学部時代に社会学を専攻していたが、フィールドワークに関心をもち、学部の枠を超えて文化人類学、民俗学、人文地理学などの関連科目を受講した。そのなかで人文地理学の講義を担当されていた教員の一人が、サモア独立国（以下、サモア）で長年フィールドワークを続けてこられた杉本尚次先生であった。杉本先生は授業でサモアをとりあげることが多く、私はサモアに関する本を読むなどして、サモアについてのイメージを膨らませていた。だが、当時の私が抱いていたサモアのイメージはポリネシア系のサモア人が集まるのどかな島であり、そこにアジアという要素はほとんど介在していなかった。

詳しい経緯は省くが、私はその後、大学院で社会人類学を専攻し、中国研究者としての道を進んでいくことになった。博士課程進学後は中国広東省で長期のフィールドワークをおこない、2010年代に入ると、中国広東省から移住した人々を追い、環太平洋エリアでフィールドワークを繰り返すようになった。オセアニア島嶼部では、華人人口が相対的に多いフィジーとタヒチ、そしてニューカレドニア、バヌアツを訪れた。

2023年3月、新型コロナウイルスの感染拡大が徐々に収まりをみせたこともあり、私はフィジーを再訪することにした。だが、渡航計画を立てていく段階で、サモアが気になりはじめた。サモアの中国系移民をめぐる英語の本が1冊 [Tom 1986]、中国語の本が1冊 [翟2003] 刊行されていたからである。不思議なことに、サモアは、オセアニア島嶼部の中国系移民研究のなかでは、フィジーやタヒチに次ぐほどの蓄積量がある。なぜサモアなのか。私は、学部時代に抱いていたイメージとの違いに興味を覚え、2～3日という短い時間であったが、フィジー経由でサモアに旅立った。

目下、サモアの中国系移民をめぐる研究は、1980年代までに移住した旧移民を中心としている。しかも旧移民の多くは、すでに中国へ戻ったようである。先行研究では、中国の対外開放政策が軌道に乗った1980年代以降の、特に21世紀以降の様相があまり描かれていない。では現在、サモアにはどれくらいの中国系移民がいて、現地でどれほどの影響力をもっているのか。その一端でも垣間見ることができればと思い、私は現地を歩いた。

サモアの首都・アピアの街をひと通りまわると、漢字の看板を掲げたレストラン、雑貨店、



法律事務所などをいくつか見つけることができた。特に、アピアの中心部には時計台があるが、その近くに「陳茂公司」と漢字で表記された大きなスーパーマーケットがあることは印象的だった（写真 1）。また、広東語で話すアジア系の人々もしばしばみかけた。ただし、アピアでみられる漢字はバヌアツほど多くはなかったし、フィジー、タヒチ、バヌアツに比べると中国系住民の影響は大きくなさそうだというのが、最初の印象であった。



写真 1 アピアの中心部。左の建物が陳茂公司（2023 年 3 月、筆者撮影）

だが、現地の人々から話を聞くにつれ、その印象は一変した。陳茂や Leung Wai のように明らかに中国系と分かる店舗だけでなく、Bluebird, Frankie's Supermarket and Wholesale, Alan Wholesale など、一見してそれと分からないサモアの大手の雑貨店やスーパーマーケットが、軒並み中国人経営であることを知ったからである。これらの企業の創始者は、大多数が 1970 年代以前に移住した旧移民である。つまり、半世紀以上にわたって、中国系移民がサモアの経済に一定の影響を与えてきたことになる。経済だけではない。サモア人の家庭料理となっている *lialia*, *keke pua'a*, *sapasui* は、それぞれ中国料理である麺、

又焼包（チャーシュー饅）、雑碎（チャプソイ）をルーツとしているという。

サモアは、2010年から2020年にかけて中国と農業技術協力のプロジェクトを結んだこともあり、2010年頃からは新移民も増加していた。サモアの空港からアピア中心街に行くまでの道路の両側には——一見したところそうはみえないが——中国人経営の小さな店舗が多く立ち並んでいることを知った。

ある40歳代のサモア人男性によると、アメリカ領サモアの方では、韓国系と中国系と日系の企業がアメリカ・ドルを得るためにしのぎを削っている。そのため、中国系の新移民がアメリカ領サモアで成功することは難しく、まだ商売する余地があるサモア（サモア独立国、旧西サモア）の方に流れてきているのだという。

以上の真偽は今後確かめていく必要があるが、それしても私が見聞したサモアは——オセアニア民族誌でよくみられる——オーストロネシア系先住民と西洋人のせめぎ合いという枠組みに収まりきらないものであった。この男性の話を聞きながらふと外をみると、サモアの村の外れにあるとは思えない日本語の車（写真2）が目にとまった。



写真2 サモア西北部のはずれにあった自動車（2023年3月、筆者撮影）

#### 参照文献

翟興付 2003 『薩摩巫華僑華人今昔』 香港社会科学出版社。

Tom, Nancy Y.W. 1986 *The Chinese in Western Samoa, 1875-1985: The Dragon Came*

*from Afar*. Western Samoa Historical and Cultural Trust.

(かわい・ひろなお 東京都立大学)

## 小嶺磯吉が収集したアドミラルティ諸島のダガー（短剣）

畑中乃咲佳・山口徹

ニューギニア島の北にビスマルク群島の島々が広がる。その北縁をなすアドミラルティ諸島の主島がマヌス島である。この地域の短剣（daggers）には、エイの尾棘が柄（つか）に複数本差し込まれたものと黒曜石製石刃の資料が知られる。慶應義塾大学にはどちらのタイプも所蔵されている。本稿で紹介する資料（ME-33）は后者で、石刃と柄が分離しているため、その接続部分を含めて観察できる。



写真1 アドミラルティ諸島のダガー（2023年3月、畑中・山口撮影）

石刃を柄に装着した状態で全長 25cm を測る。最大幅は接続部の 4.0cm、厚さは 1.7cm、断面は扁平な楕円形を呈する。接続部の深さは 2.7cm で、扁平な石刃の基部を差し込む形状にくぼむ。類例資料の情報にもとづき、クリソバラヌス科に属するパリナリ（*Parinarium* sp.）の実の樹脂で石刃が膠着されていたと考えられる。おそらく柄自体も、軟質のサゴヤシ材をパリナリの樹脂で固めることで成形されている [Ohnemus 1998]。長さ 14.3cm を

測る柄は下端（柄頭）に向かって窄まる形状を呈し、膠着材の樹脂に混ぜ込まれた朱色の地に沈線や刻みがほどこされる。白色で塗られたこれら凹部に囲まれることで、群青色の文様・図柄が鮮やかに浮き上がる。しかし、群青色の顔料はメラネシアには産しない。おそらく、西洋人が綿布製衣類の漂白剤として持ち込んだレキットブルーかインディゴブルーが、現地の人々によって顔料に転用されたのであろう [Barnecutt 2007]。

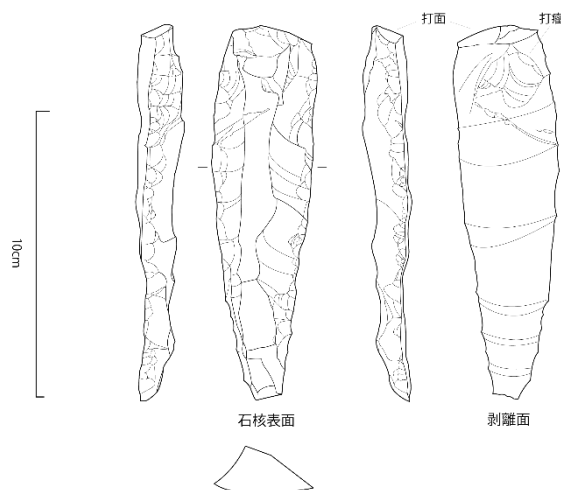


図1 黒曜石製石刃（写真とは逆に尖端を下向きに配置）

二面からなる柄の上部文様は両面で異なる。片面には、逆三角形の顔のようなモチーフが表現される。モチーフの上端は細い沈線で区切られ、下端は湾曲する太い沈線で囲われる。浮彫された逆三角形の外側には3辺ともに鋸歯状の刻みが入る。内側も彫りくぼめられ、上辺中央から伸びる垂線が鼻梁のように見える。その両側に彫り残された粒状部は地の朱色で、配置から推測すると眼球だろうか。もう片面は幾何学文で飾られる。最上部の第1文様帯は、白く彩色された沈線と下向きに刻まれた鋸歯小文からなり、先述した人面モチーフの上端を区切る沈線に連なって柄を一周する。第1と第2文様帯とのあいだは群青色で塗られる。第2文様帯は鋸歯文付き沈線2本で上下を挟まれる。上側沈線の鋸歯文は第1文様帯と同様に下向きに、下側沈線は上向きに付く。上下2本の沈線間には、3つの楕円文が浮彫りされ、中央の楕円は地の朱色が残り、両側の楕円は群青で彩色される。いずれの楕円も、彫りくぼめられた白色凹部のなかに浮き上がって見える。楕円間の上部と下部にも山形の削り残しが挟まる。上部の山形文は地の朱色のまま、下部は群青色に彩色される。また、柄の両面には上部文様帯の下に、群青色の×印が浮き上がる白色小円文が縦方向にそれぞれ3つ並ぶ。

黒曜石製の石刃は最大長 13.0cm、最大幅は 3.7cm を測る。アドミラルティ諸島では、マヌス島南東沖に位置するロウ島 (Lou) が黒曜石の主要産地として知られる。20 世紀初頭には、素材となる黒曜石ブロックや加工された石刃が交易品としてロウからマヌスの村々に運ばれていた [Fredericksen 2000]。本資料の石刃は、すでに剥離面が形成されていた石核を、打撃具で同一方向に複数回たたくことで剥ぎ取られた剥片である。石核表面の稜と同じ方向に剥離したことを示す痕跡 (リング) が剥離面に残り、打撃時に形成される打瘤 (バルブ) のふくらみも認められる。最尖端部は尖っておらず、加工時もしくは使用時の段階で欠損したと考えられるが、両側縁に細かな剥離を二次的に加えることで、刃部を直線に調整するとともに、尖端が鋭利になるよう角度がつけられている。刺突の機能を意識して製作されたことが分かる。

本資料は、小嶺磯吉による収集品の 1 点である。1901 年ごろに独領ニューギニアに渡り、ドイツ総督府の仕事を請け負いながら、造船業や採貝業、コプラ生産、南洋貿易と多角経営を展開した人物で、現地島民からさまざまな民族資料を入手したコレクターとしても知られる [臺 2020]。独領ニューギニアのなかで、アドミラルティ諸島の本格的な植民地経営は現地島民の抵抗もあって一足遅く始まった。開発の先鞭を担ったのが小嶺で、1907 年ごろから 1911 年にかけてコプラ農園や造船所を開設し、海産物漁を展開していた。ダガーの収集もこの時期だった可能性が高い。

ビスマルク群島では、植民地経営にともなう人頭税や賦役といった政策を通して 20 世紀初頭に貨幣経済が急速に浸透し、現地島民が自らの生活のために製作し使用していた民具自体が貨幣価値を持つようになっていった [山口 2015]。アドミラルティ諸島のダガーも同様で、1910 年ごろまではバーター交換のなかで貿易商人や現地行政官に譲渡されていたものが、1920 年代には西洋からの旅行者が土産物として容易く入手できるようになっていた。この社会変化にともなって、柄の文様は簡略化され、黒曜石の刃部調整が単純化した可能性も指摘されている [Torrence 1993]。小嶺のダガーはまさにその変わり目に収集された資料と考えてよい。西洋由来の群青色が使用される一方で、柄の両面で異なる図柄やその彩色、そして二次剥離によって鋭利に調整された刃部といったマテリアリティが、当時の社会的状況のなかで交換財としてどのような意味を持っていたか、その解明が次の課題となる。

## 参考文献

臺 浩亮 2020 「植民地期のニューギニアにおける小嶺磯吉の活動に関する予察——1905



- 年から 1911 年における収集活動を中心に」『史学』89(3) : 1-52、三田史学会。
- 山口 徹 2015 「ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学——ビスマルク群島ニューアイルランド島の造形物に関する予察」『史学』85(1-3) : 401-439、三田史学会。
- Barneclutt, V. 2007 “Thomas Farrell: Trading in New Ireland.” in S. Cochrane and M. Quanchi (eds.) *Hunting the Collectors: Pacific Collections in Australian Museums, Art Galleries and Archives*. Cambridge Scholars Publishing, Newcastle. pp. 120-129.
- Fredericksen, C. 2000 “Points of Discussion: Obsidian Blade Technology in the Admiralty Islands, 2100BP to 50BP.” *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin* 20: 93-106.
- Ohnemus, S. 1998 “An Ethnology of the Admiralty Islanders: The Alfred Bühler Collection, Museum der Kulturen, Basel.” University of Hawai'i Press, Honolulu.
- Torrence, R. 1993 “Ethnoarchaeology. Museum Collections and Prehistoric Exchange: Obsidian-Tipped Artifacts from the Admiralty Islands.” *World Archaeology* 24(3): 467-481.

(はたなか・のえか 慶應義塾大学大学院／やまぐち・とおる 慶應義塾大学)

## 民族を越え広がるフィジーの在来嗜好品・カヴァ

大島 崇彰

オセアニア島嶼地域には、カヴァという嗜好品が広く普及している。カヴァとは、同地域で栽培されるコショウ科の灌木であり（学名：*Piper methysticum*）、その根を原料とする飲料は嗜好品として古くから飲用され、この飲料自体もカヴァという名称で知られている。カヴァにはアルコール分は含まれていないが、カヴァラクトンという成分が含まれ、飲用すると特有の酩酊感をもたらされる。伝統的な儀礼などの際に、もしくは数名から数十名規模の宴席の場で参加者同士が会話を楽しみながら飲用することが多い。個人的な感想を言えば、味は土っぽく舌や喉が痺れたりして決して美味しいものではないが、飲んでいるうちになんだかいい気分になるのは確かだ。本エッセイは、メラネシアのフィジーにおいて、民族を越えた広がりを見せるカヴァの飲用や生産・流通活動をめぐる動向に焦点を当て、その一端を紹介したい。

さて、カヴァはこれまで先住系フィジー人の伝統的な飲料として知られており、儀礼においては象徴的な意味合いを持つほか、日常的にも老若男女問わず広く飲用されてきた。他方で近年では先住系フィジー人以外の民族の飲用も広く知られるようになった[e.g. Mohanty 2017]。その中でとりわけ多いのがフィジーの人口の約4割を占めるインド系フィジー人の飲用である。筆者は2022年の調査中、首都スヴァでインド系フィジー人が経営する民泊に滞在したのだが、週末になるとその家族・友人たちのカヴァ飲みによく誘われた。近所の商店で売られている小分けの茶色の紙袋に入った粉末のカヴァを買ってきて、プラスチックのバケツの中で水に溶かし、ココナッツの殻でできたカップで掬い、皆で順番に飲むというのが彼らの飲用スタイルだった（写真1）。もちろん一概には言えないが、筆者が主な調査地としている先住系フィジー人の村落と比べると、都市部のインド系住民の飲用の頻度や一度に飲む量は比較的少ない印象だ。彼らはカヴァをたくさん飲むのは健康に良くないと考えているのだ。とはいえ、週末に知人を招き、カヴァを飲むのは都市部に住むインド系フィジー人たちにとって馴染み深いことのように、彼らの文化として一定程度浸透している様子であった。



写真1 スヴァの住宅でのカヴァ飲みの様子（2022年9月24日、筆者撮影）

そして換金作物としてのカヴァの生産及び流通の領域においても、インド系フィジー人の存在感は大きい。カヴァは元来先住系フィジー人が居住する村落内での自家消費を目的に栽培されてきたのであるが（写真2）、近年では換金作物としての栽培が広まっている [Prasad and Raj 2006]。統計上栽培を行っている農家の多くは先住系フィジー人なのだが、大規模なプランテーション経営、収穫されたカヴァの加工、市場への流通などを行っているのは、主にインド系フィジー人である [e.g. Murray 2000]。筆者の調査地であるフィジー第2の島ヴァヌア・レブ島ザカウロベ州の地方村落においても、先住系フィジー人たちが畑地で栽培したカヴァを、インド系の仲介業者がまとめて買い取り、洗浄や裁断などの加工をしたのち都市部に出荷していた（写真3）。カヴァの換金作物化の拡大の背景にはインド系フィジー人を中心とした生産・流通システムの確立があることが窺える。こうしたシステムの確立は村落部に1つの現金獲得手段を提供した一方で、売買価格をめぐっては、仲介業者の采配により決められる部分が多い。農家の中には、そうした状況に多少の不満を持つものも見られる。カヴァの換金作物化の拡大が現地の社会関係にいかに関与しているのかという点は、私自身の今後の調査の課題となる。



写真2 先住系フィジー人農家がカヴァを栽培している農園（2022年10月5日、筆者撮影）



写真3 インド系フィジー人の仲介業者のカヴァ加工場。手前に近隣の農園で収穫されたカヴァが積みまれている（2022年10月16日、筆者撮影）

ここまでインド系フィジー人とカヴァの関わりを紹介してきたが、フィジーに住む中国系住民とカヴァの関わりも注目すべき点である。そもそも遡れば、1930年代にはすでに中国系住民がカヴァの栽培を行い、スヴァの市場で売買をしていたとの報告もある [Prasad and Raj 2006]。残念ながら、筆者自身は中国系住民がカヴァを栽培しているという話はまだ実際に耳にしていない。しかし筆者の調査村落から最も近い都市であるサブサブでは、乾燥させたカヴァを機械で粉末にするパウンディング工場が中国系住民によって経営されており、近隣のカヴァ農家がカヴァを持ち込む姿も見られた。中国系住民とカヴァの関わりに関するさらなる情報や、そうした動向が先住系フィジー人にどのように捉えられているのかなど、今後追加の調査が必要となる。

#### 参考文献

- Mohanty, M. 2017 “Fiji Kava: Production, Trade, Role and Challenges.” *The Journal of Pacific Studies* 37(1): 5-30.
- Murray, W.E. 2000 “Neoliberal Globalization, ‘Exotic’ Agro-exports, and Local Change in the Pacific Islands: A Study of the Fijian Kava Sector.” *Singapore Journal of Tropical Geography* 21(3): 355-373.
- Prasad, N. and S, Raj 2006 “The Perils of Unmanaged Export Growth: The Case of Kava in Fiji.” *Journal of Small Business & Entrepreneurship* 19(4): 381-393.

(おおしま・たかあき 東京都立大学大学院)

## タイの潮州系料理

横田浩一

私は2023年2月に2週間ほどタイに滞在する機会を得た。今回のタイ滞在では、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの一環としてタイの潮州系華人の宗教に関する予備的な調査を行うことを主な目的としていた。一方で、私は近年食文化に関する研究を進めており、タイにおける中国系料理、特に潮州料理がどのように発展しているのかにも関心を持っていた。そのため、タイでの調査中に中国系料理の定着や現地の料理との融合の状況、タイの潮州系料理などの情報を見聞きし、中国での自分の体験と照らし合わせて比較するきっかけができた。以下では、そのような経験に基づき、タイの潮州系料理について考えてみたい。

タイの人口の約1割は華人（居住国の国籍を持ち中国に出自のある者）であるとされ、その内55%程度を潮州系が占めるとされている。また、潮州系華人が華人の中で最多集団となる国家は、タイ以外にはないと言われる。タイ華人の特徴は、文化的に同化の度合いが高く、自己認識においてもタイ人としてアイデンティティを持つ者が多い点であるという[スキナー 1981]。食文化においても同様の現象があり、一見すると潮州系華人の影響が大きいと思われるが、それが外来のものだとは認識されていない料理がある。たとえば、米粉で作った麺（または麺料理）であるクィッティオ（写真1）や豚足ご飯のカオカームー（写真2）は、それぞれ中国では粿条（潮州語で *guediao* または *guediou*）、猪脚飯（潮州語で *degiohung*）と呼ばれ、潮州地域の庶民のソウルフードと呼べる料理である。しかもクィッティオに関しては潮州語の発音が借用されている。私にとって驚きだったのは、「こういった料理が中国起源であることを多くのタイ人は知らないだろう」と日本人のタイ研究者が私に語った点である。つまり、中国系料理は、それほどまでにタイの社会に溶け込んでいることを意味している。





**写真1** クィットィオ。麺が肉の隙間から少しだけのぞいているのが見える。スープは甘い。(2023年2月19日、筆者撮影)



**写真2** カオカームー。潮州の猪脚飯より甘い味付け (2023年2月23日、筆者撮影)

このようなタイの中国系料理、なかでも潮州にルーツを持つ料理の特徴は、全体的に色合いが茶色っぽく、甘味が強い点である。一般に中華圏の潮州料理は、淡泊で裸糸でも澄んだスープが特徴だとされる。また、潮州の猪脚飯は甘味が全面的に前に出てこないものが多い。一方で、タイの潮州系料理が上記のような特徴を持つのははおそらく、現地の味覚に馴染ん

だ料理へと変化しているためであると思われる（つまり、タイではより甘い味付けが好まれる傾向にある）。

バンコクのヤワラート地区は世界でも最大規模のチャイナタウンだとされる。ここではいわゆる高級海鮮料理としての潮州料理レストランを多く見ることができる。現地で知り合った潮州系華人である S 氏に、昔からある名店に連れて行っていただいた。ここは潮州料理という看板を掲げてはいないが、現在の店主で 4 代続く潮州料理店であるという。メニューには 1 ページ目からフカヒレ、魚の浮き袋、アワビ、ナマコと高級海鮮料理が並ぶ。オーダーを S 氏におまかせしたところ、魚の浮き袋のスープ（写真 3）、蟹のすり身の包み揚げ（写真 4）、焼売（写真 5）、焼き粿条（写真 6）を注文していただいた（S 氏も含めて 3 人で食べた）。S 氏に聞くと、これらはどれもバンコクの昔ながらの潮州料理に相当するという。中国の潮州地域では、焼売、焼き粿条（潮州炒粿肉）以外はどれもあまり見かけない料理であり、少なくともポピュラーとは言いがたい。また味付けもこれまでのタイの中国系料理と同様に甘味が全面に出ている。



**写真 3** 魚の浮き袋のスープ 紅紋魚鰾（2023 年 2 月 22 日、筆者撮影）



写真4 蟹のすり身の包み揚げ 蟹棗 (2023年2月22日、筆者撮影)



写真5 燒賣 經典潮州燒賣 (2023年2月22日、筆者撮影)





**写真 6** 焼き粿条 潮州炒粿条 (2023年2月22日、筆者撮影)

ヤワラート地区に限らず、タイの中国系料理の特徴は上記のように、潮州と比較すると甘味が強いことが挙げられる。また、中国系料理にもかかわらず（というよりも、日本の町中華などの方が特殊かもしれないが）中国系料理であることをあまり全面に押し出していないため、タイの他の料理店と店構えなどの点においても、高級店以外は大きな違いが見られないことが多い。また、潮州系の華人が多数を占めていることからであろうか、S氏に案内していただいた店と同様に、ヤワラート地区の中国料理店では「潮州料理」であることをあえて看板に掲げている店舗はほとんどみられない。そういったなか、例外的に一目で潮州料理だとわかる看板を掲げる店舗をバンコクで見かけたので、現地滞在中に一度入ってみた。私が注文したのは滷味（醤油ベースのたれに漬けたもの）のガチョウ肉（写真7）、魚のつみれのスープ（写真8）、カイラン菜炒め（写真9）、ハマグリ炒め（写真10）、焼き粿条（写真11）である。実際に食べてみて驚いた。なぜなら、これらのどれもが色味も薄く、味も甘さを抑えた中国の潮州料理そのものだったからである。帰り際にオーナーに話しかけると、彼女は潮州から来た第一世代だと述べた。店員もほとんどが中国から来た第一世代の潮州地域出身者だそうで、「なるほどそういうことか」とこれまでタイで食べてきた料理との違いに納得した。



写真7 ガチョウ肉 滷鵝 (2023年2月26日、筆者撮影)



写真8 魚のつみれのスープ 魚丸湯 (2023年2月26日、筆者撮影)



写真9 カイラン菜炒め 炒芥藍菜 (2023年2月26日、筆者撮影)



写真10 ハマグリ炒め 炒蛤蜊 (2023年2月26日、筆者撮影)





写真11 焼き粿条 炒粿条 (2023年2月26日、筆者撮影)

あくまで短期の滞在でしかないが、以上のような経験からいくつかの考察が導き出せるだろう。①タイの潮州系料理は、エスニック料理としての要素が前面に出ず、現地の料理と融合している。②タイ人の味覚に合わせているため、中国にルーツを持ち現地化した料理と中国料理の境界が明瞭でない。③近年中国からタイへの移住者が増え、バンコクの中華街で潮州料理店経営などのビジネスを行なう人も増えているという。今後もタイの潮州系料理は、古くからの伝統と新たな移住者による料理の融合によって変化していく可能性があるだろう。

#### 参考文献

スキナー、ウィリアム 1981『東南アジアの華僑社会——タイにおける進出・適応の歴史』  
山本一訳、東京：東洋書店 (Skinner, G. W. 1957 *Chinese Society in Thailand: An Analytical History*. Ithaca: Cornell University Press)。

(よこた・こういち 人間文化研究機構・東京都立大学)

## 東南アジアにおける女性性器切除／女子割礼

松岡 竜大

我々は成人式や結婚式、葬式など様々なライフイベントを経験する。女性性器切除/女子割礼（以下、Female Genital Mutilation/Cutting の略である FGM/C と記す）もその一つであり、あらゆる文化・社会的背景によって行われる女性器を切除する行為や儀礼を指す。これをめぐる議論は、研究の蓄積が非常に多い。長年、女性の「人権」を擁護すべきという普遍主義と民族や地域の「文化」を守るべきという相対主義との相克の中で論争が繰り返されてきた。しかし、その研究や論争の対象とされる地域の多くはアフリカであり、東南アジアにおける FGM/C についてはほとんど調査分析されてこなかった。本エッセイでは、研究の蓄積の多いアフリカと少ない東南アジアにおける FGM/C 研究を比較し、東南アジアにおける女性性器切除/女子割礼研究の有する意義を示したい。

国際的に FGM/C が問題として取り上げられるようになった大きな契機として、1979 年スーダンの首都ハルツームにて行われた国際保健会議が挙げられる。この会議がスーダンで行われたため、アフリカ各地の FGM/C がとりざたされ、アフリカにおける FGM/C についての研究も増加した。2000 年代には人類学者のシェル＝ダンカンやアブジャラフらによって FGM/C に関する論集が出されたが、東南アジアにおける FGM/C は取り上げられず、もっぱらアフリカに関するものである。広大なアフリカ大陸において行われている FGM/C は多様であるが、同様に広大な東南アジアにおける研究はいまだに数少ない。

アフリカにおける研究の多くは通過儀礼としての FGM/C に注目しているが、東南アジアにおける FGM/C の多くは幼年期に行われ、通過儀礼の枠組みでは捉え難い。くわえて、アフリカにおける FGM/C では近年は儀礼性が強調される傾向が縮小してきたものの、長年 FGM/C に伴う様々な儀式や衣装が言及されてきた。しかし、東南アジアにおいては FGM/C に伴って様々な儀式が行われるということがそもそも少ない。ゆえに、アフリカにおいては、研究者も現地の人々も通過儀礼として FGM/C を捉えがちであるが、東南アジアの FGM/C については通過儀礼概念を念頭において説明することが困難である。東南アジアにおける FGM/C 研究は儀礼、ことに通過儀礼の視点からではない FGM/C 研究の視座を提供してくれることが期待できる。

アフリカにおいては反 FGM/C 活動が公民ともに多く行われており、ゆえに FGM/C

を行っている当事者らも FGM という語を解している。他方、東南アジアの草の根においては FGM や FGM/C という語自体が広く知れ渡っているとはいえない現状がある。アフリカにおける FGM/C 研究では、FGM/C という言説を自明のものとしているが、東南アジアにおける研究は、研究者や国際機関のような西洋世界によって生み出された FGM や FGM/C という「言説」に囚われず、行われていることの実態を捉えることが重要である。FGM/C 研究全体において FGM/C というグローバルな言説そのものを考え直す端緒となるだろう。

ここまで述べた FGM/C 研究への意義に加え、アフリカでは考察のし難い東南アジアならではの海を介した FGM/C 研究への寄与も存在する。

東南アジアにおける FGM/C の多くはイスラーム、ことにシャーフイー派と関連する。アフリカにおいてもスーダンをはじめ、元々はイスラームと関係の無かった FGM/C がイスラームの言説に包摂され、現代においていかにイスラーム法や信仰と結びついているかに関する論稿が多く出されている。他方で、東南アジアでのイスラームと FGM/C の関連についての論稿は少なく、これを明らかにすることは東南アジア特有の海を介したイスラームの伝播と FGM/C の伝播についての示唆を与えてくれる。アフリカにおいても近隣民族等との関連や比較が FGM/C 研究において行われることはあったが、イスラームの拡がりという視点から考察することは、海を通じたマクロな視点での FGM/C 研究への新たな扉を開くことになるだろう。

## 参考文献

- Newland, L. 2006 “Female Circumcision: Muslim Identities and Zero Tolerance Policies in Rural West Java.” *Women's Studies International Forum* 29: 394-404.
- Yufu, I. and A. Rashid 2023 “The Cultural Meaning of ‘Female Genital Mutilation’ in Rural Malaysia: The Female Body and Sexuality through the Medical Gaze.” *Journal of Southeast Asian Studies*: 1-24.

(まつおか・りゅうた 東京都立大学大学院)

## To Make a Sanheyuan Perfect

Asuka Tamura

In September 2022, I traveled to Taiwan as part of the Maritime Asian and Pacific Studies Project as I have been attracted to residential spaces for some time. The main purpose was to visit the "Sanheyuan (三合院)," a type of house characterized by a U-shaped exterior. This particular structure is often cited as a representation of the Hakka culture, and in recent years, many of them have been renovated and used as tourist resources. I would like to describe how traditions are being transformed in the reconstruction of traditional architecture based on my research in Jiadong (佳冬) Township, Pingdong (屏東) County.



**Photo 1:** Sanheyuan after the renovation owned by Mr. X's lineage. (Photo taken by the author, September 2022)

Jiadong Township is known as a place where much of the historical Hakka culture still remains. About half of the residents are Hakka and Mr. X, the cheerful man who guided us around at this time, was one of them. He carefully explained, while walking with us, each of the Sanheyuan that lined the streets in Jiadong. An impressive point was that he always mentioned the materials used in a building's construction. He made a clear distinction between reusing the original stone or wood and using new construction materials such as steel or concrete, making clear that the former was more

valuable. He walked around smiling and saying things like, "This is made of concrete, so it's no good." I broke out in a cold sweat at the thought that the people who lived there might have heard him.

In fact, his career had a lot to do with his statement. His lineage's Sanheyuan was rebuilt about 15 years ago, and Mr. X was the very person who proposed and promoted it. His primary focus at the time was to restore the traditional form of the house, for which he and his lineage had hired a historic preservation architect. Although the cost was more than a typical, it was not a big deal to achieve their goal. They followed the U-shaped structure and retained building materials (such as carved stones, wood, and ornate decorations adorning the roof) inherited from their ancestors. Although some parts were newly rebuilt, such as the tablets and beams, the old ones were not discarded but preserved in other rooms.

As mentioned above, Taiwan's Sanheyuan is considered a tourist resource as part of traditional Hakka culture. However, if that were the only purpose, there would be no need to spend a fortune to hire historic preservation architects or to reuse old materials. When I asked Mr. X about this, he replied, "The original Sanheyuan is beautiful and splendid. It would be a disgrace to our ancestors if we descendants treated it poorly. It's natural to want to further develop what we have inherited from our ancestors." He also



**Photo 2:** Colorful decorations covering the exterior walls. (Photo taken by the author, September 2022)



**Photo 3:** A fretwork window panel made by stone. (Photo taken by the author, September 2022)



said, “It is not enough to just pay a lot, nor is it enough to have respect for our ancestors. Only when both are present will a Sanheyuan be perfect.”



**Photo 4:** The old tablet is also kept in storage, not thrown away. (Photo taken by the author, September 2022)

His explanation made sense to me. Until then, I had thought that the Sanheyuan was merely a Hakka cultural resource and that its renovation was simply "reuse" for the purpose of tourism. However, after listening to his "Sanheyuan theory", I realized that acts seemingly to just "reuse" cannot be grasped solely from the perspective of tourism or economic profit. What is retained in the old? Or, contrarily, what is renewed during the renovation process? Such questions can reveal social and cultural values that lie well hidden in the background. It is often said that doubting the obvious is the foundation of anthropology, and it was a great benefit of this fieldwork that I was able to experience this firsthand.

Notes: This essay is an English translation of a section in Tamura's charge in a report 「現代に生きる『伝統』——台湾客家地域の音楽・民居・社区景觀」 to be published in the second issue of 『客・観』 with additions and corrections.

(たむら・あすか 東京都立大学大学院)



## 東京の「狐の行列」における中国人の集まり

李 婧

### インバウンド観光客が戻ってきた

2023年1月4日の日本経済新聞に「インバウンド再起動」というタイトルの記事が掲載された。コロナ禍となり一瞬で消失した外国人観光客が再び日本に戻りつつあることを反映した記事であった。わたし自身、新宿などでアジア系の観光客が買い物をする姿を見かけるたびに、インバウンド観光客が戻ってきたことを実感し、中国人観光客の姿を見て感慨に浸った。2015年以降に観光客数や旅行消費額で注目された中国人観光客も、コロナ禍になってすっかり姿を消していたからだ。中国人観光客の行き先は買い物が楽しめる都会だけではない。東京郊外の町にも彼らはいた。そうした町の1つには、わたしが7年間フィールドワークを続けてきた東京都王子も含まれる。

### 中国人に注目される「狐の行列」

王子といえば、毎年大晦日に行われる「狐の行列」が有名である。「狐の行列」の特徴は、現場で様々な種類の狐のグッズが展示されることや、観客までもが行事に参加し、あたかも「狐になった」かのような化粧や服装をすることである。「狐の行列」を見物に来る者にとっては、狐の顔に似せたメイクをしたり、狐の仮面を被ったりする参加者の姿が物珍しく目に映っているようだ。だからこそ、様々な人が興味をかき立てられて集まってくるのだ（写真1）。



**写真1** 「狐の行列」に展示される狐の大面とその周りに集う人々の様子（2019年6月、王子狐の行列の会 実行委員会より提供）

「狐の行列」に参加する中国人観光客の人数は、2010年から2019年までの間に驚くほど増えた。その頃の「狐の行列」の現場は、どこに行っても中国語での喋り声が聞こえるぐらいに中国人観光客で溢れていた。彼らは遠くから狐の格好をした人々の行列を見るだけで満足できず、地元の人々と同じように狐の格好をして行列に加わった。来日前にインターネットで「狐の行列」のことを調べて、狐をイメージした着物を用意する者もいた。

さらに、中国人観光客は「狐の行列」の現場で撮った写真や動画を WeChat や「小紅書 (RED)」という、中国で人気のアプリでアップしたり、TikTok でライブ中継したりする（写真2）。「狐の行列」は中国人観光客や在日外国人が集う場になり、その様子は SNS を通じて中国本土まで拡散されている。



写真2 中国のユーザーが「小紅書 (RED)」にアップした「狐の行列」体験 (2023年3月10日閲覧、「小紅書 (RED)」アプリより転載)

### ホストになった中国人

「狐の行列」に参加する中国人には、ゲストとして行事を楽しむ者だけではなく、中国語での案内や通訳といった作業を行うスタッフもいる。中国人観光客の急増により、彼らへの対応を務めるホスト側の中国人が必要となったからである。実際に、王子では中国話者のボランティアも募集されている (写真3)。ボランティアはほとんどが在日中国人留学生であ



り、「狐の行列」の現場で中国人観光客相手の案内や通訳を担当するほか、商品販売や行列の整列、設営と片付けなど、あらゆる作業にかかわっている（写真4）。



写真3 中国人ボランティアがつける中国語対応のプレート（2023年7月1日、筆者撮影）



写真4 狐の大面を設営する様子、黄色い半纏を着用している中国人ボランティア（2018年12月31日、筆者撮影）

ただし、在日中国人留学生が「狐の行列」でボランティアとして働く動機には、かなりのバリエーションがある。わたしが聞いた彼らの応募目的は、「狐の行列が面白そうだから」という行事自体への純粋な興味にとどまらないものであった。例えば、中国東北部出身のボランティアは「日本語をできるだけ上達させて、地元に戻って日本語教師になりたい」と言っていた。そのための日本語の練習の場に「狐の行列」が選ばれたのだ。同じく東北部出身のボランティアは「中国にいた時に「狐仙」（狐の神様）の話をよく聞いたから〔「狐の行列」を〕見てみたい」と語った。さらに、天津出身のボランティアは、「天津にも旧正月に「廟」（民間信仰に基づく地元の神様を祀る祠）に行く慣習がある。ここ（王子の神社）に来るのも同じ」と述べ、大晦日の「狐の行列」を故郷の年越し慣習に関連づけていた。

このように「狐の行列」に参加する中国人には、観光客として訪れる者だけではなく、ホスト側で働く者も少なからずいる。彼らにとって「狐の行列」は日本文化を体験する恰好の場というだけではなく、日本や中国での生活の延長にある場でもあった。東京都王子の地元住民が支えてきた「狐の行列」は、日本を訪れる中国人とのかかわりのなかでどのように変容していくのか。今後の展開に注目していきたい。

（り・せい 東京都立大学大学院）

## 長崎の和華蘭料理

平松 咲織

学部生時代、八百善の料理書『料理通』から卓袱料理を知った。食べるのが好きなわたしは、いま人類学という分野で卓袱料理を研究している。大学院にも慣れてきた頃、卓袱料理を食べてみようと思い立ったが、宴会料理であるためひとりで食べることができない。両親に同行を懇願し 2022 年 8 月長崎へ向かった。

長崎の夏はとても暑く、山に囲まれるため坂と階段が多いが、青い海や空が心地よかった。観光雑誌には異国情緒漂う街と紹介され、日本、中国、オランダが融合し何だか「わからん」という駄洒落を交えた「和華蘭文化」という造語もある。その代表格として紹介されるのが卓袱料理だ。

### 卓袱料理とは

卓袱料理の歴史は古く、1571 年ポルトガル船が来航して以降、出島や唐人屋敷との交流のなかで発展してきた。文献には円卓を囲んで食べる日本風の中国料理と書かれ、江戸時代の料理書には、中国の「八仙卓」を用いた共同膳が由来とある。身分の上下を気にせずテーブルを囲みながら料理を楽しむのは、個人の食事が膳に盛られる銘銘膳が主流であった江戸期の日本人にとって珍しかったに違いない。のちに雰囲気だけでも味わおうと形式のみを採用した「略式」という考えも登場し、しつらいや器物を中国風にして異国趣味を楽しむこともあった。

現代の卓袱料理は料亭の高級料理、冠婚葬祭の仕出し料理として食されている。今回訪れた料亭の仲居さんも日常的な食事としてはあまり食べないと教えてくれた。長崎を訪れた観光客が珍しい料理として食べるそうだ。

### 現代の卓袱料理を食べる

この調査では比較のカジュアルな店舗と老舗料亭を比較したいと思い、事前に着目した 2 店の料理屋を訪れた。A 店は昭和 43 年（1965）に創業し、高級料亭よりお手頃な価格帯で卓袱料理を楽しめる。門構えは日本風であるが（写真 1）店内は洋室もあり（写真 2）、卓袱料理以外にも食べられるため地元の人もいた。一方 B 店は 200 余年の歴史をもつ老舗であ



る。多層階の木造建築に入れば、階段を昇り降りし迷路のようだ（写真3、写真4）。両店とも親切に対応してくださり、写真掲載の許可も頂いた。

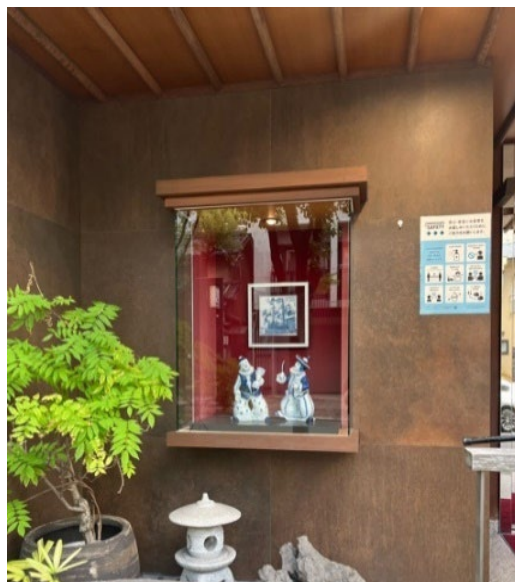


写真1 A店入口付近。中国人とオランダ人の陶器、後ろには阿蘭陀船の絵が置かれる  
(2022年8月1日、筆者撮影)



写真2 A店の内装。比較のカジュアルなスタイルであり朱色の円形テーブルが特徴的  
(2022年8月1日、筆者撮影)



**写真3** B店の外装。老舗料亭などは木造建築が多い（2022年8月2日、筆者撮影）



**写真4** B店の内装。和室の個室席であり黒色のテーブルが置かれる（2022年8月2日、筆者撮影）

料理内容は季節や店により変化するが、献立の組合せは一般的に鰯碗、小菜、大鉢、中鉢、煮物、飯・香物、水菓子、梅碗という順序で提供される。各々前には重ねた2枚の取皿（自分で取り分け、給仕の手間を減らすため）があり、大皿から箸またはトンスイと呼ばれる匙

を使ってとりわけるのが中国料理の食べ方と似ていると感じた。女将の「尾鱈をどうぞ」が食事の始まりの挨拶である。お吸い物である尾鱈を飲むと乾杯を酌み交わす。その後、バラ煮と呼ばれる薔薇の形を模した煮豆が出されたが、一口目の甘さには驚いた。16世紀半ば以降、ポルトガル人が伝えた砂糖は長崎の食文化に浸透しており、最後に提供される梅椀（お汁粉）にも砂糖がふんだんに使われる。また、料理には薬膳思想も取り入れられ、例えば、豚の角煮（写真5）は「甘」である豚肉と相生関係である「辛」のからしが添えられるのだ。貿易港として海外の窓口となった長崎の食は、元々あった基盤のうえに交易により伝来した品種を用いた「ながさき伝統野菜」、コショウやハッカクなどの香辛料、油分を使った料理法や食の思想などが融合し、それが卓袱料理や郷土料理として現代にも伝わっている。



**写真5** B店で提供されたハトシ・アジサイ揚げ（白皿）、角煮。この2品は卓袱料理の定番となっている。コロナ禍の影響から大皿での提供は中止（2022年8月2日、筆者撮影）

阿蘭陀船や唐船と共に江戸期のオランダ人や中国人が描かれた絵画や陶磁器などの内装、和食のように季節感を感じさせない食器類などは、和華蘭イメージを創りあげているように感じた。特にA店はその傾向が強く、例えば、「卓袱」を中国風の朱色の円卓であると説明する。だが、江戸期の『長崎名勝図会』や明治期の『新撰和洋料理精通』に描かれる卓袱の図は、四角い卓にテーブルクロスがかけられ、卓袱＝朱色の円卓と必ずしもいえるわけ

ではない。時代が下るごとに卓袱料理の持たれるイメージは変化しているように思える。今後はその変遷もみていきたい。

余談ではあるが、グラバー園で餌に飛びつく大量の鯉に慄き卓袱料理の写真やデータが入ったスマートフォンを池に落としたときは慌てたが、事なきを得た。失敗もありながら多くの人に助けられた初調査となった。

(ひらまつ・さおり 東京都立大学大学院)

## 2022年度海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学 拠点研究会・活動報告

### 海域アジア・オセアニアプロジェクト東京都立大学キックオフミーティング

日時：2022年10月28日（金）17：00-19：00

#### プログラム：

17:00-17:05 開幕の辞 綾部真雄（東京都立大学）

17:05-17:30 趣旨説明 河合洋尚（東京都立大学）

「トランスネシア研究プロジェクトの概要と研究意義について」

17:30-18:00 発表① 横田浩一（人間文化研究機構／東京都立大学）

「潮州からみる海域アジア：想像／創造されるカテゴリーとはみだす領域」

18:00-18:30 発表② 河野正治（東京都立大学）

「フロンティアとしての島嶼世界：ミクロネシアにみる異質な人々の馴化・交錯・並存」

18:30-19:00 討論

19:00 閉幕の辞 山口 徹（慶應義塾大学）

#### 要旨：

2022年9月から人間文化研究機構「海域アジア・オセアニア」プロジェクトの拠点の1つが、東京都立大学人文科学研究科に設置された。プロジェクトの開始を記念して、2022年10月28日に下記の内容でキックオフミーティングを実施した。

「趣旨説明」（河合洋尚）では、東京都立大学拠点研究を「トランスネシア・プロジェクト（略称：トラネシ）」と命名すること、海域アジア・オセアニア研究プロジェクトの意義として海域エリアにおけるボーダーレスな人・モノ・情報などの移動を検討していくことが述べられた。具体的な事例としては、客家やオセアニアのアジア系などを取り上げ、従来の空間区分では必ずしも十分に考察の対象となつてこなかった地域間のネットワークや人々の移動や文化的な融合などを視野に入れる重要性を示した。

次に、「潮州からみる海域アジア——想像／創造されるカテゴリーとはみだす領域」（横田浩一）では、地域を越えた人の移動およびカテゴリーの想像／創造という観点から潮州を対象に台湾への移住者のエスニシティや潮州料理の形成過程などの事例を紹介した。そして、地域を越えた人の移動や文化は特定の地域や人々に注目しているだけでは見えてこない



め、地域や集団で分断せずに人やモノ・情報の移動とネットワークの形成をもたらすエスニシティや文化の変容を詳細に分析する必要があることを示した。

最後に、「フロンティアとしての島嶼世界——ミクロネシアにみる異質な人々の馴化・交錯・並存」(河野正治)では、西洋文化との接触や英語圏との関係に比して、アジアとの関係が軽視されてきたことを批判する近年の歴史研究の動向に触れながら、アジアのオセアニア系とオセアニアのアジア系の現状を捉える枠組みについて検討した。さらに、近年注目されているオセアニアへの中国の進出とアメリカの覇権争いという国際政治のマクロな構図では捉えられないミクロな生活実践、すなわち多様なアジア系の人々がオセアニア住民とそれぞれの距離感をもって暮らす現場の雑多性に注目する必要があることを論じた。

発表①、②の後には総合討論が行われ、「海」というキーワードから今後どのように本研究プロジェクトを発展させるのかなど、活発な議論が展開された。

#### **講演会：「環境アセスメントの人類学と学際的研究——わが風水研究の足跡を辿りつつ」**

渡邊欣雄（東京都立大学名誉教授）

日時：2023年3月5日（日）16:00-18:00

#### **要旨：**

本講演で渡邊欣雄氏は、学際的で国際的な標記の研究に至った経緯を説明しつつ、類種の考え方＝思想や世界観が時間・空間を超えて広く普及してきたことを紹介した。

その初期に、氏は地理学と文化人類学を架橋する研究としての「現地人の地理学」の研究を志していたという。氏の院生時代(1969～75年)には、地理学は現地人の知識を対象とせず、また文化人類学は現地の環境観・自然観を、あまり相手にしていなかったからである。

氏の調査は初期には沖縄であり、「沖縄の世界観」について学術誌に発表していた。いわゆる天上他界観や海上他界観に関する先行研究の整理と、調査に基づく研究だった。その反響は大きく、あるコメントを受けて類種の思想や世界観が東南アジアにもあるとわかり、また戦前の朝鮮にも類種の先行研究があることを知る幸運に恵まれたという。その後行った氏の台湾調査でも、体系的な環境に対する思想が存在することが判明した。それが現地人の説く環境アセスメント(環境影響評価)としての風水思想だった。現地人のこうした自然や環境に対する思想を知るや、氏は即座に学際的な風水研究を組織し(1989～93年)、人類学を

超えた研究領域までに拡大していったとする。

こうした学術環境下で、風水思想発祥の思想史を、中国大陸での調査や文献研究により徐々に復元し、中国国内はもとより東南アジア、韓国・朝鮮、沖縄、日本などに風水思想が伝播していったことを、各地域の地理的・歴史的事例を挙げながら解説した。

風水は体系的な現地人の環境に対する影響評価の思想であり、それは中華文明の及んだ東アジア・東南アジア地域に共通した考え方だという。すなわち現地の地形・地質・水系・気候・動植物などが、人の造る都市・村落、家屋、墳墓などに影響を与えるという独特な影響判断で、グローバルな思想としての性質を持つが、同時に各地域には独自の環境影響評価法も存在しており、ローカルな知識をも併せ持っていることは注意すべきだとする。

最後の質疑応答では、氏が考えた風水研究の学術用語や概念が、「風水」とは呼ばない現地にどれほど適用可能なのかなどの、活発な議論が行われた。

(文責：横田 浩一)

海域アジア・オセアニア NEWSLETTER 創刊号

---

発行日 2023年7月31日

編集発行 海域アジア・オセアニア研究プロジェクト 東京都立大学拠点

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 東京都立大学人文科学研究科

transnesiatmu@gmail.com